

# 鞠智城・古代山城 シンポジウム

古代山城の成立と変容

10/14 日 10:30  
17:10

明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール

[主催] 熊本県・熊本県教育委員会・明治大学日本古代学研究所

[後援] 明治大学博物館・明治大学社会連携機構・熊本県文化財保護協会



鞠智城イメージキャラクター  
ころう君

鞠智城・古代山城シンポジウム  
**古代山城の成立と変容**

日時：平成30年10月14日（日） 10:30～17:10

場所：明治大学アカデミーコモン・アカデミーホール（東京都千代田区神田駿河台1-1）

主催：熊本県、熊本県教育委員会、明治大学日本古代学研究所

後援：明治大学博物館、明治大学社会連携機構、熊本県文化財保護協会

**日 程**

- 9:30 開 場
- 10:30 開 会  
あいさつ 熊本県教育長 宮尾 千加子  
明治大学日本古代学研究所所長 石川 日出志  
来賓紹介
- 10:50 基調講演 10:50～11:50  
「古代山城の成立と変容」  
亀田 修一（岡山理科大学教授）
- 11:50 昼食休憩 11:50～13:00
- 13:00 講 演① 13:00～13:40  
「七世紀後半の国際社会と古代山城」  
仁藤 敦史（国立歴史民俗博物館教授）
- 13:40 講 演② 13:40～14:20  
「朝鮮式山城の特徴－主に兵站と備蓄について－」  
赤司 善彦（大野城心のふるさと館館長）
- 14:20 講 演③ 14:20～15:00  
「神籠石系山城の捉え方～築城年代・築城主体論の克服」  
向井 一雄（古代山城研究会代表）
- 15:00 休 憩 15:00～15:20
- 15:20 パネルディスカッション 15:20～17:10  
コーディネーター 佐藤 信（大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事）  
パネリスト 亀田 修一 仁藤 敦史  
赤司 善彦 向井 一雄  
中村 友一（明治大学准教授）  
五十嵐 基善（明治大学兼任講師）  
矢野 裕介（熊本県教育委員会）
- 17:10 閉 会  
※10/7～10/15「古代山城の城門（パネル展）」を開催（アカデミーコモン1F展示スペース）

## 講演者・パネリスト・コーディネーター紹介

### 【講演者・パネリスト】

亀田 修一 (かめだ しゅういち)

九州大学文学部卒業。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。大韓民国忠南大学校留学。岡山理科大学助教授を経て、現在、岡山理科大学生物地球学部教授。専門は考古学。博士（文学）。

仁藤 敦史 (にとう あつし)

早稲田大学第一文学部卒業。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。早稲田大学第一文学部助手、国立歴史民俗博物館助教授を経て、現在、国立歴史民俗博物館教授、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任。専門は日本古代史。博士（文学）。

赤司 善彦 (あかし よしひこ)

明治大学文学部卒業。福岡県教育委員会、九州歴史資料館、九州国立博物館、福岡県教育庁総務部副理事兼文化財保護課長を経て、現在、大野城心のふるさと館館長。大宰府跡の発掘調査に長年携わる。専門は日本考古学。

向井 一雄 (むかい かずお)

関西大学経済学部卒業。関西大学考古学研究室で考古学を学ぶ。1991年から日本及び韓国、中国東北部に遺る古代朝鮮式山城を研究・調査する研究者間のネットワーク機関として古代山城研究会を組織し、現在、古代山城研究会・代表を務める。専門は日本考古学。

### 【パネリスト（コメント）】

中村 友一 (なかむら ともかず)

明治大学文学部卒業。明治大学大学院文学研究科博士課程修了。明治大学文学部助教を経て、現在、明治大学文学部准教授。専門は日本古代史。博士（史学）。

五十嵐 基善 (いがらし もとよし)

明治大学文学部卒業。明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。明治大学文学部助手を経て、現在、明治大学文学部兼任講師。専門は日本古代史。

矢野 裕介 (やの ゆうすけ)

同志社大学文学部卒業。熊本県教育委員会、熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館を経て、現在、熊本県教育庁教育総務局文化課文化財調査班参事。鞠智城跡の発掘調査に長年携わる。

### 【コーディネーター】

佐藤 信 (さとう まこと)

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授を経て、現在、大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事。東京大学名誉教授。専門は日本古代史。博士（文学）。

(発表順・敬称略)

## 【目 次】

基調講演	「古代山城の成立と変容」(亀田 修一) ……………	1
講演①	「七世紀後半の国際社会と古代山城」(仁藤 敦史) ……………	13
講演②	「朝鮮式山城の特徴—主に兵站と備蓄について—」(赤司 善彦) ……………	23
講演③	「神籠石系山城の捉え方～築城年代・築城主体論の克服」(向井 一雄) ……	35
参考資料		

## 【基調講演】

### 古代山城の成立と変容

亀田 修一（岡山理科大学教授）

#### 1. はじめに

古代山城（小稿では朝鮮式山城・神籠石系山城をあわせてこのように呼ぶ）に関する研究は、古くよりなされ、これまでの成果では、660年の百済滅亡前後の朝鮮半島における混乱、663年の白村江の戦いの敗戦を契機として、対唐・新羅用に築かれたとの考えがおもな意見と考えられる(図1)。ただ、細部ではいろいろな意見もある。

今回の発表では、これまでの諸先学の研究成果によりながら、「古代山城の成立と変容」について、小生が最近、おもに指摘していることから、「未完成と完成」、「遺構と遺物の総合化」などを中心にお話ししたい。

諸先学の研究成果に関しては、報告書も含め多くのものがあるが、ここでは末尾に参考文献としておもなもの、今回の発表に関わるものをいくつかあげさせていただいた。

#### 2. 未完成と完成

古代山城が未完成であることは古くから指摘されている。亀田は2014aの論文で改めて未完成であることについて取り上げ検討し、半数以上(9/16)の神籠石系山城が未完成、またはその可能性が推測されることを指摘した。筑前阿志岐城跡・鹿毛馬神籠石・杷木神籠石、筑後女山神籠石、肥前おつぼ山神籠石、豊前唐原山城跡、周防石城山神籠石、讃岐城山城跡、播磨城山城跡などである(図2)。

ただ、これらの未完成に関しても、土塁造成予定場所を加工し、列石を途中まで並べたが、土塁を盛っていない豊前唐原山城跡や、列石+土塁はできあがっているが、その列石土塁が全周していない筑前阿志岐城跡・筑後女山神籠石など、また門の唐居敷用の石を途中まで加工して門の場所近くまで運んでいるが、その加工が途中で止まっている讃岐城山城跡などいろいろな段階の未完成がある。

逆に、完成している、またはほぼ完成している古代山城は、朝鮮式山城のその所在地が確認されている6カ所のうち、4カ所が挙げられる。筑前大野城跡、肥前基肆城跡、対馬金田城跡、肥後鞠智城跡である。このほか神籠石系山城であるが、備中鬼ノ城も完成していると考えている。

このほか詳細がわからないものが多いが、上記のような完成・未完成の古代山城をすべて同列に扱って古代の防衛体制を論じて良いかというのが、亀田の考えの一つである。

さらに、文献史料から719年頃までには古代山城の機能は停止されたと考えられているが、698年の「繕治」を含めて8世紀以降も維持管理、再利用されたことが考古資料・文献史料から確認できるものが筑前大野城跡、肥前基肆城跡、肥後鞠智城跡の3つの城である。これら北部・中部九州に位置する3つの城はこれまでの諸先学が述べているとおり、当時の国家・大宰府が特別に重要視・意識した山城と考えられる(亀田2018b)。

### 3. 遺構と遺物の個々の検討と総合化

#### (1) 遺構

古代山城の遺構としては、土塁・門・建物・その他いろいろあるが、土塁に関しては一般的に版築土塁と考えられている。ただ、この版築土塁も詳細に検討すると、一般的に描かれる「堰板」がすべて使用されているのか、その使用に関しても前面（正面）・側面すべてに使用されているのか、よくわからないものが多い。そのような意識で版築土塁を検討すると、堰板使用版築土塁も全面堰板使用版築土塁・一面堰板使用版築土塁などがあり、堰板を使用していない堰板不使用版築土塁も存在することが推測できた（図3・4、亀田2018a）。

例えば備中鬼ノ城の西門南東部では前面（正面）・側面に堰板を使用した全面堰板使用版築の可能性が推測できる（図5）が、その他大多数の山城の土塁は少なくとも側面にいつも堰板を使用していたのではないように推測でき、さらに備前大廻小廻山城では前面・側面ともに堰板を使用していない堰板不使用版築土塁の存在の可能性が推測できた。

このような土塁構築技法に関しては、朝鮮半島の山城においてもみることができ、これらの違いがどのような意味を持つのかは今後さらに検討しなければならないが、少なくとも日本列島の古代山城の土塁構築技法が単純ではなく、朝鮮半島からの土塁構築技術の伝播のあり方も意識して、古代山城全体を検討すべきと考えた。

そのほか門の構造（掘立柱門〔唐居敷の有無〕、礎石立門）、門の完成・未完成・建て直し、いろいろな建物（管理棟・兵舎・倉庫など）の有無、その他貯水施設（井戸、池）、鍛冶場、石切場など多くのことが検討されており、これまで述べてきた小生の完成・未完成論で考えるならば、神籠石系山城の城内遺構の確認・未確認、多さ・少なさも説明しやすいように思われる。

#### (2) 遺物

古代山城出土遺物としては、土器・瓦・その他がある。最も多く確認されるものは土器である。しかし、神籠石系山城は調査地点との関わりもあるであろうが、一般的に出土量は少ない。

また、瓦が出土する山城は筑前大野城跡、肥前基肆城跡、肥後鞠智城跡、そして実際に城内の城関係建物に使用されたかはわからないが、備中鬼ノ城で少量出土している。7、8世紀における瓦の使用は寺院、官衙などが一般的で、その他の施設ではほとんどみることができない。古代山城は国家が関わる「城」であり、「官衙」関連として使用されることは問題ないが、確実な古代山城使用例は上記の3つの山城である。瓦の使用も山城の「重要性」「機能」などを表わしている可能性がある（亀田2014b）。ただ、古代山城に宗教施設が造営される、古代山城が宗教施設に変容するなかで瓦が使用される可能性も考えておくべきである。

そのほかの遺物も含め、土器・瓦類は山城の築城・使用・廃城年代決定に重要な意味を持つ。ただ、多くの神籠石系山城では前述のようにその点数が極めて少なく、年代決定に苦労しているのが実態である（図8）。そのような中で木村龍生（2012）が行った鞠智城跡出土土器の検討は極めて重要で、土器出土量の変遷によって鞠智城の変遷が推測できるようになった（図6）。この鞠智城跡の土器出土量の変遷とその他神籠石系山城の出土遺物を比較検討することで多少なりとも神籠石系山城の年代も推測できるようになっている。神籠石系山城では全体で数点しか土器が出土しない場合、7世紀中頃の土器が

1、2点、7世紀末頃から8世紀初め頃の土器が4、5点出土すると確実な年代として7世紀末頃から8世紀初め頃の山城であると理解されることがある。

鞠智城跡では7世紀第3四半期の須恵器が23点、7世紀第4四半期～8世紀第1四半期の須恵器が165点出土している。鞠智城の築城年代はわからないが、698年に繕治されており、後者の165点はこれに関わるものと考えられている。そして前者の23点が築城時関連のものと考えられている。この数字を1/10にしてみると、築城時が2、3点となり、繕治段階が16点前後となる。この数字はそのまま神籠石系山城築城年代決定に反映できるとは言えないが、十分参考になる。

このような出土遺物の検討は筑前大野城跡や肥前基肆城跡でも進められているが、より検討を進めただけならば、そのほかの古代山城研究に大きな影響を与えるものと考えている。

遺物が比較的多く出土している山城は698年に繕治された大野城跡・基肆城跡・鞠智城跡と、これら3つの城ほどではないが、対馬金田城跡、備中鬼ノ城がある。これらは完成したと考えられる山城である。遺物出土量の多寡も完成・未完成論で説明しやすいと考えている。

### (3) 遺構と遺物の総合化

遺構と遺物のそれぞれの検討例をあげたが、古代山城にかかわらず、考古学では両者を総合的に検討しなければならないと考えている(亀田2015)。

遺構があれば、人間が大地に関わった痕跡であり、遺物も残ると考えている。その遺構の数が多ければ、遺物もそれに応じて残っていると考えている。これまで述べてきた古代山城の遺構と遺物の話もこれと同じであると考えている。

古代山城の発掘調査・研究が進んでいる肥後鞠智城跡を例に挙げると、木村龍生(2012)の土器変遷案と矢野裕介(2012)の遺構変遷案は重要な調査研究成果である。両者にはややズレがあると赤司善彦は考え、2016年の論文においての両者の関係の修正案を提示している(図7)。確かに、木村と矢野の考えをそれぞれ少しずつ幅広く捉えようまくいくのではないかとと思われる(亀田2018b)。

このような遺構と遺物の総合化は、肥前基肆城跡の礎石建物群と百済系単弁軒丸瓦・重弧文軒平瓦の使用のされ方に通じるものと考えている(図9)。

## 4. 古代山城の成立と変容

### (1) 古代山城の成立

#### 660年の百済滅亡、663年の白村江の戦いの前に築かれた古代山城

660年の百済滅亡、663年の白村江の戦い以前に築かれた可能性がある古代山城関連遺跡が酒船石遺跡である。『日本書紀』斉明天皇2(656)年歳条に記された「宮の東の山に石を累ねて垣となす」の「垣」である可能性が推測されている。ただ、石列の南東部は途切れており、全周はしていない。全長は確認されていないが、約700mはあるようである。時期は出土土器などから7世紀中頃に造営され、天武天皇13(684)年の白鳳南海地震で倒壊したものと推測されている(明日香村教育委員会2006)。

また、渡辺正気(1988)は『日本書紀』の斉明天皇4(658)年歳条の末尾にみえる「或本云。至庚申年(660)七月、(中略)由是国家以兵士甲卒陣西北畔。繕修城柵、断塞山川之兆。」に注目し、前半が斉明天皇の西征、後半が神籠石を示すのではないかと考えた。この渡辺説に関しては、現在も賛否

両論ある。

### 660年の百濟滅亡、663年の白村江の戦いの後に築かれた古代山城

天智天皇2(663)年の白村江の戦いに破れた後に築かれたものが、『日本書紀』同3(664)年の水城、同4(665)年の長門城、筑紫国大野城・椽城(基肄城)、同6(667)年の倭国高安城、讃吉国山田郡屋嶋城、対馬国金田城跡である。

これらは明らかに唐・新羅の攻撃を意識して築かれたものであり、長門城・大野城・基肄城に関しては百濟から亡命してきた達率答牒春初・憶禮福留・四比福夫らの指導によることが記されている。

そして『続日本紀』文武天皇2(698)年に繕治された城が大野城・基肄城・鞠智城である。肥後鞠智城跡に関しては初めての記録への登場であり、築城年代は不明である。ただ、この繕治記事への登場、その後の記録などから665年の大野城・基肄城、または667年の金田城などと同時期に築かれたものと推測されている。ただ、その地理的な位置から対唐・新羅用、対隼人用の意見がある。

### 神籠石系山城はいつ築かれた？

神籠石系山城の築城時期に関しては、朝鮮式山城の前、同時期、後という考えがあるが、これまで述べてきたように決定的な出土遺物がなく、現在も意見は定まっていない。

そのなかで備中鬼ノ城に関しては、比較的調査が進み、ほかの神籠石系山城に比べると出土遺物も多い。城壁は完成し、修繕もされ、城内に管理棟・倉庫などもあり、懸門・石敷き門道などの城門構造、角楼(雉城)の存在などの諸特徴が対馬金田城跡、讃岐屋嶋城跡などと類似することから、筆者はこれらと同時期に築かれたと考えている。北部九州から河内・大和への交通路上の重要性から、瀬戸内海(備讃瀬戸)を挟む讃岐に屋嶋城が築かれ、吉備に城が築かれなるとは考えにくいこともその考えの基礎にある。さらに出土土器も肥後鞠智城跡の土器の出土傾向を参考にすると、やはり上記の想定で問題ないと考えている。

そのほかの神籠石系山城に関しては、やはり決め手に欠けているといわざるをえない。瀬戸内海沿岸地域と北部九州地域の神籠石系山城、これらがすべてほぼ同時に築城を開始したのか、それとも地域的に時期がズレながら築城されていったのか。未完成・完成という観点からもさらに検討すべきであると考えている。

また、築城の背景に関しても、鬼ノ城に関しては朝鮮式山城と同じように対唐・新羅防御用と考えている。さらに地域支配のための山城築城の考えに関しては、築城時期によってより検討しなければならないが、山陰道や東山道など西日本の古代山城築城地域以外になぜ築かれなかったのかという点に関する検討も必要であろう。

### (2) 古代山城の終焉とその変容

#### 古代山城の停廃記事

以上のように664年の水城、665年の大野城・基肄城などの築城、698年の大野城・基肄城・鞠智城繕治など、7世紀後半代には古代山城が築かれ、維持管理されている。しかし、大宝元(701)年の高安城を廃城、和銅5(712)年の河内国高安烽の廃止、そして養老3(719)年の備後国安那郡茨城・葦田郡常城の停止記事などと、各山城の出土遺物からほとんどの古代山城は8世紀初め頃には停止されたのではないかと考えられている。



ただ、一方で、出土土器を詳細にみると 8 世紀前半以降の土器も少なからずある。しかし、これらが「城」で使用されたのか、それとも「城」機能終了後に何らかの意味で使用されたのか、その検討も重要である。

筑前大野城跡では宝亀 5 (774) 年に対新羅用に四天王寺埴像 (塑像) 4 体が作られている。肥前基肆城跡では 8 世紀後半の「山寺」墨書土器も出土している。備中鬼ノ城においても詳細な時期は不明であるが、瓦塔が出土し、隆平永寶 (初鑄 796 年) が柱穴から出土した平安時代前半の仏堂が検出されている。

さらに筑後高良山神籠石には『延喜式』式内社高良大社があり、『日本紀略』延暦 14 (795) 年条に、高良神が初めて従五位下の神階を授けられたことが記されており、周防石城山神籠石にも『延喜式』式内社石城神社があり、『日本三代実録』貞観 9 (867) 年条に石城神が従四位下の神階を授けられたとある。

このように神籠石系山城の中には 8 世紀前半以降に宗教施設に変容したものがあるようである。8 世紀以降の土器に関してはそのような視点からの検討も必要である。

#### 古代山城の変容—使用され続けた古代山城—

上記のように、古代山城が廃止され、その後わからなくなったもの、寺や神社にかわったものがあるが、筑前大野城・肥前基肆城では 8 世紀前半代の軒先瓦を含む瓦が使用され、瓦葺建物が新築、改築されたことがわかる。これらに関しては、すでに検討されているように、大宰府の地域支配との関係も含め倉庫群が新たに建てられ、維持管理されたことが考古資料・文献史料から明らかにされている (赤司 2016、松川 2018 など)。

また、肥後鞠智城跡に関しては、8 世紀中頃に一時空白があり、8 世紀末頃から新たに瓦葺建物が建てられ、倉庫などとして使用されたことがこれも考古資料・文献史料から明らかにされている。ただ、ここでは 8 世紀の軒先瓦は確認されていないようである (熊本県教育委員会 2012、木村 2015 など)。

そして、これら 698 年に繕治された 3 つの城は 9 世紀後半頃には使用されなくなったようである。

#### 5. おわりに

7 世紀中頃から後半の百済の滅亡・白村江の戦いなどを契機に築城された日本列島の古代山城は 8 世紀初め頃の廃止・停止を経て、そのまま存在が確認できなくなった城と、寺や神社など形態は異なるが、宗教施設に変わり、その宗教施設が現在まで続いているものがある。

一方、大宰府周辺の大野城・基肆城・鞠智城は宗教施設も含みながら、9 世紀後半頃までやはり単なる城ではなく、地域支配の機能も含めて、性格をやや変えながら継続している。

古代国家・大宰府、それぞれの地域にとって重要と認識された城は途中途切れることもあったかもしれないが、変容しながら継続し、あるものは現在まで続いたようである。

#### [参考文献]

- 赤司善彦 2016 「鞠智城の建物景観の推移」『海と山と里の考古学』山崎純男博士古稀記念論集編集委員会  
明日香村教育委員会 2006 『酒船石遺跡発掘調査報告書』

- 小田富士雄編 1983『北九州瀬戸内の古代山城』日本城郭史研究叢書 10、名著出版
- 小田富士雄編 1985『西日本古代山城の研究』日本城郭研究叢書 13、名著出版
- 亀田修一 2014a「古代山城は完成していたのか」熊本県教育委員会編『鞠智城跡Ⅱ—論考編一』
- 亀田修一 2014b「百済山城と刻印瓦の階層性（予察）」『半田山地理考古』2、岡山理科大学地理考古学研究会
- 亀田修一 2015「古代山城を考える—遺構と遺物—」岡山県古代吉備文化財センター編『古代山城と城柵調査の現状』平成 27 年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第 28 回研修会発表要旨集、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会
- 亀田修一 2016「西日本の古代山城」須田勉編『日本古代考古学論集』同成社
- 亀田修一 2018a「日本列島古代山城土塁に関する覚書—版築・堰板について—」『水利・土木考古学の現状と課題Ⅱ』大韓民国ウリ文化財研究院
- 亀田修一 2018b「繕治された大野城・基肆城・鞠智城とその他の古代山城」『大宰府の研究（大宰府史跡発掘調査 50 周年記念論文集）』高志書院
- 木村龍生 2012「第Ⅵ章 第 1 節（1）鞠智城跡出土の土器について」『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会
- 木村龍生編 2015『鞠智城跡出土土器・瓦の生産地推定に関する基礎的研究』熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館
- 熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡Ⅱ—鞠智城跡第 8～32 次調査報告—』
- 松川博一 2018「律令制下の大宰府と古代山城」『九州歴史資料館研究論集』43、九州歴史資料館
- 宮小路賀宏・亀田修一 1987「神籠石論争」『論争・学説日本の考古学 6 歴史時代』雄山閣
- 向井一雄 2010「古代山城研究の成果と課題—近年の調査成果からみた新古代山城像—」『季刊邪馬台国』105、梓書院
- 向井一雄 2016『よみがえる古代山城—国際戦争と防衛ライン—』歴史文化ライブラリー440、吉川弘文館
- 矢野裕介 2012「第Ⅵ章 第 3 節 遺跡の時期区分と変遷」『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会
- 渡辺正気 1988「神籠石の築造年代」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編『考古学叢考』中巻、吉川弘文館

**[引用挿図]**（いずれも一部改変引用）

- 図 1：村上幸雄・乗岡実 1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備考古学ライブラリー 2、吉備人出版
- 図 2、図 5 全体図、図 9-1：古代山城サミット実行委員会 2010『古代山城サミット展示会 あつまれ!!古代山城』
- 図 3、図 8-12・13：小川秀樹 2006『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅰ』行橋市教育委員会
- 図 5 土器：金田善敬・岡本泰典編 2013『史跡鬼城山 2』岡山県教育委員会
- 図 5 遺構図：村上幸雄・松尾洋平 2005『古代山城鬼ノ城』総社市教育委員会
- 図 6：熊本県教育委員会 2012
- 図 7：赤司 2016
- 図 8-1～6：高松市教育委員会 2010『古代山城日韓シンポジウム～瀬戸内・日本・東アジアからの視点で屋嶋城の実像にせまる～』、7～11：草場啓一編 2008『阿志岐城跡』筑紫野市教育委員会、14～16：渡邊芳貴 2012『史跡永納山城跡Ⅱ』西条市教育委員会
- 図 9：小田富士雄「基肆城跡」基山町史編さん委員会編『基山町史 資料編』基山町

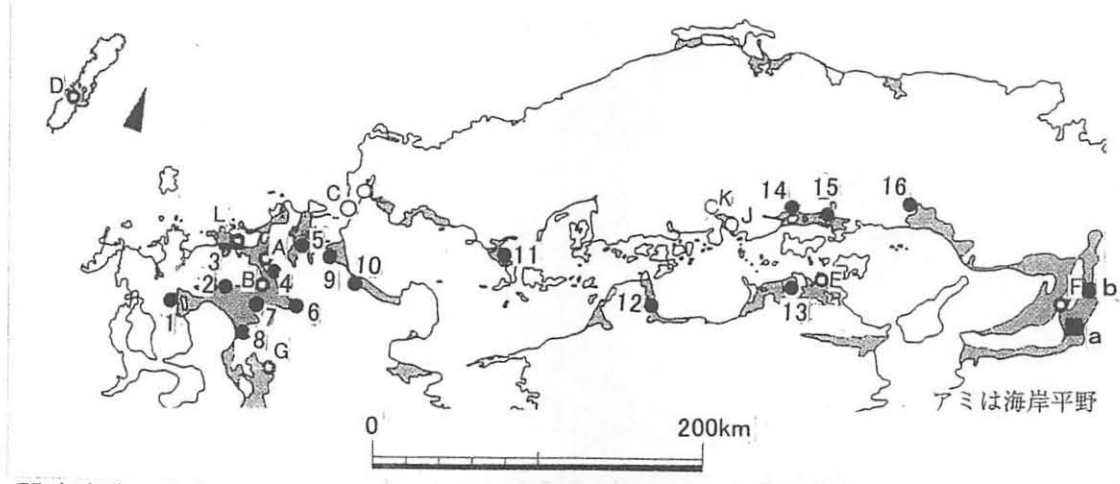


図1 関連遺跡の分布

- A. 大野城跡 B. 基肆城跡 C. 長門城 D. 金田城跡 E. 屋嶋城跡 F. 高安城跡 G. 鞠智城跡  
 H. 三野城 I. 稲積城 J. 茨城 K. 常城 L. 怡土城跡 1. おつぼ山神籠石 2. 帯限山神籠石  
 3. 雷山神籠石 4. 阿志岐城跡 5. 鹿毛馬神籠石 6. 杷木神籠石 7. 高良山神籠石 8. 女山神籠石  
 9. 御所ヶ谷神籠石 10. 唐原山城跡 11. 石城山神籠石 12. 永納山城跡 13. 讃岐城山城跡 14. 鬼ノ城  
 15. 大廻小廻山城跡 16. 播磨城山城跡 a. 飛鳥寺・牽牛子塚古墳・高松塚古墳・キトラ古墳 b. 薬師寺  
 C・H・Iは所在地不明



1. 豊前唐原山城跡

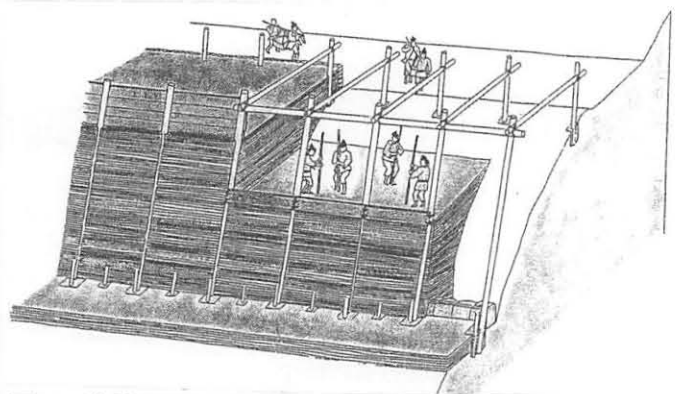
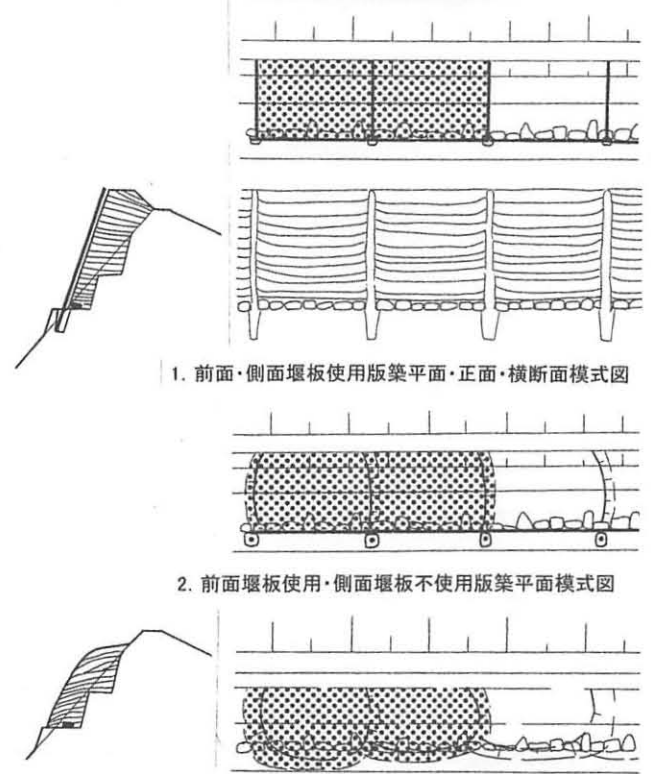


図3 豊前御所ヶ谷神籠石土塁築造復元図



2. 筑前阿志岐城跡

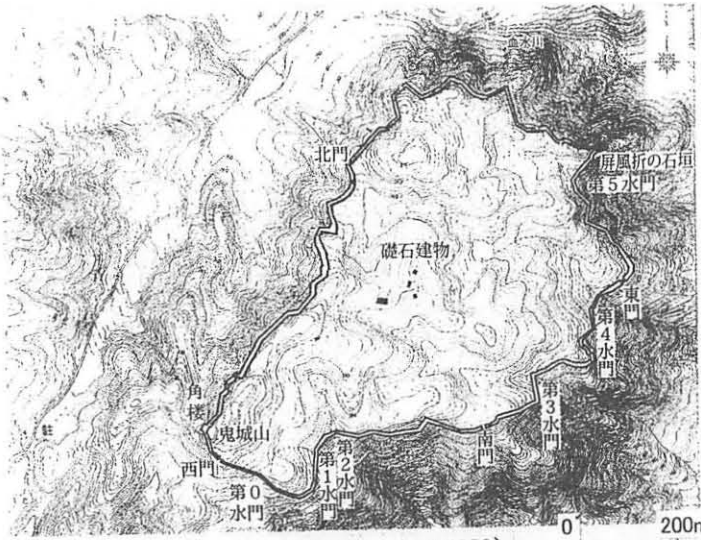
図2 未完成の古代山城



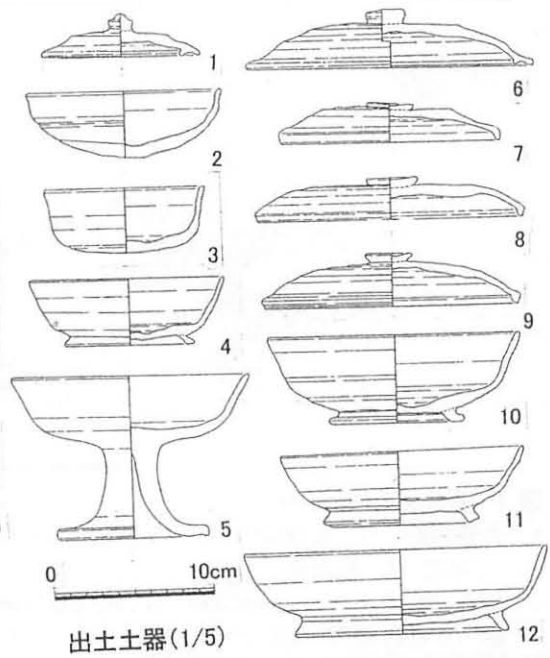
1. 前面・側面堰板使用版築平面・正面・横断面模式図

2. 前面堰板使用・側面堰板不使用版築平面模式図

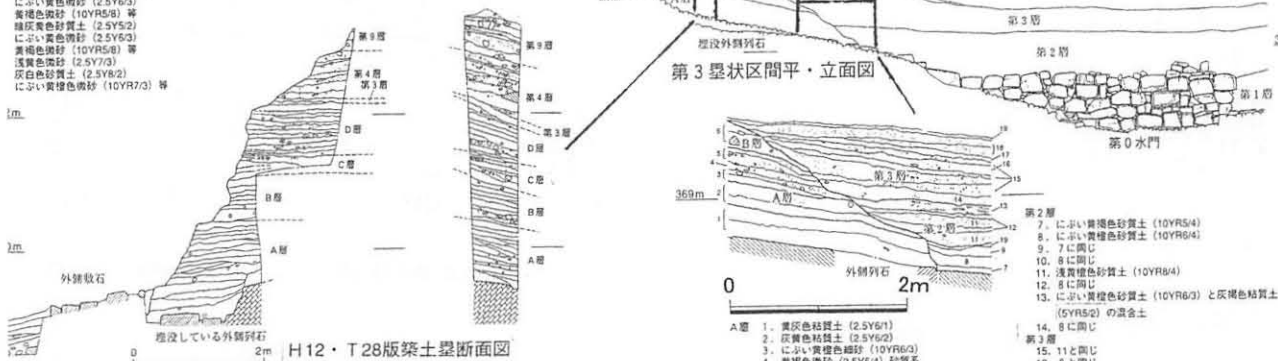
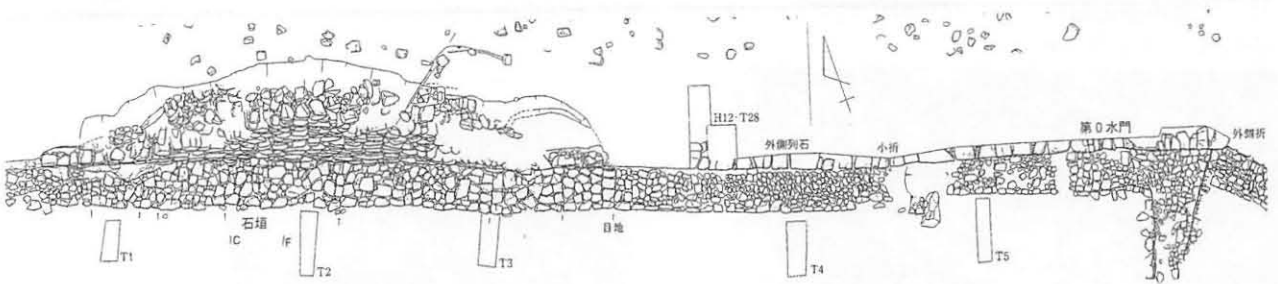
図4 版築模式図 3. 堰板不使用版築平面・横断面模式図



鬼ノ城跡全体図(1/15000)

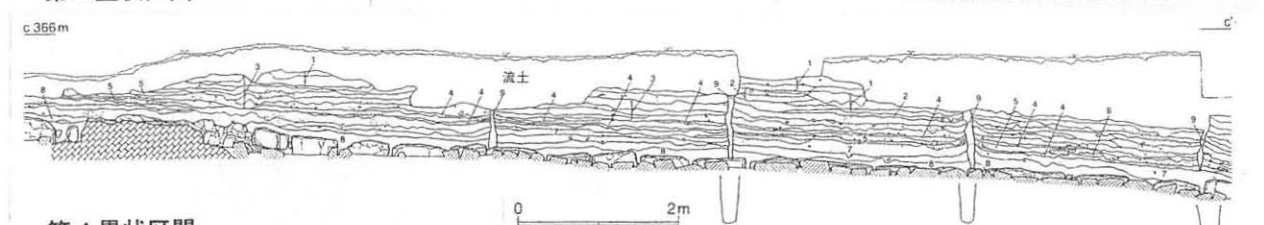


出土土器(1/5)



第3 壘状区間

版築土壘の境

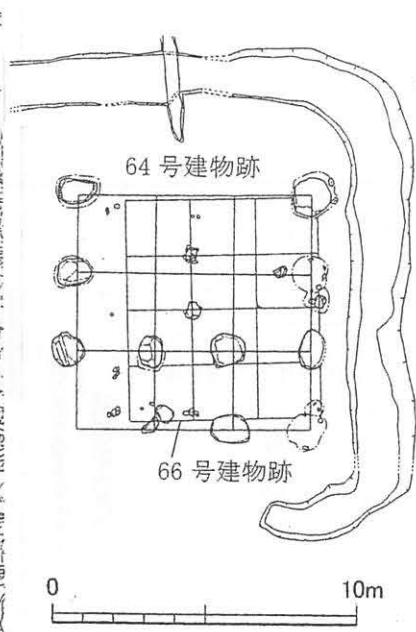


第4 壘状区間

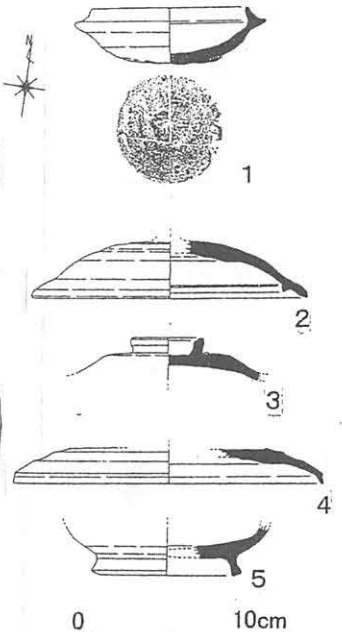
図5 備中鬼ノ城の遺構と遺物



1. 鞠智城跡全体図(1/15000)

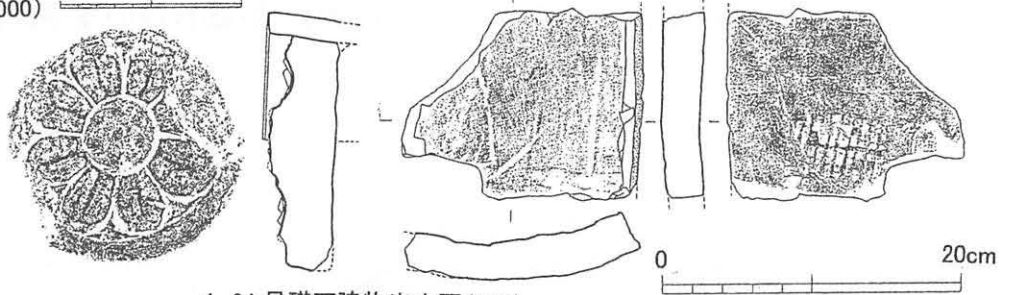


2. 64・66号礎石建物(1/300)

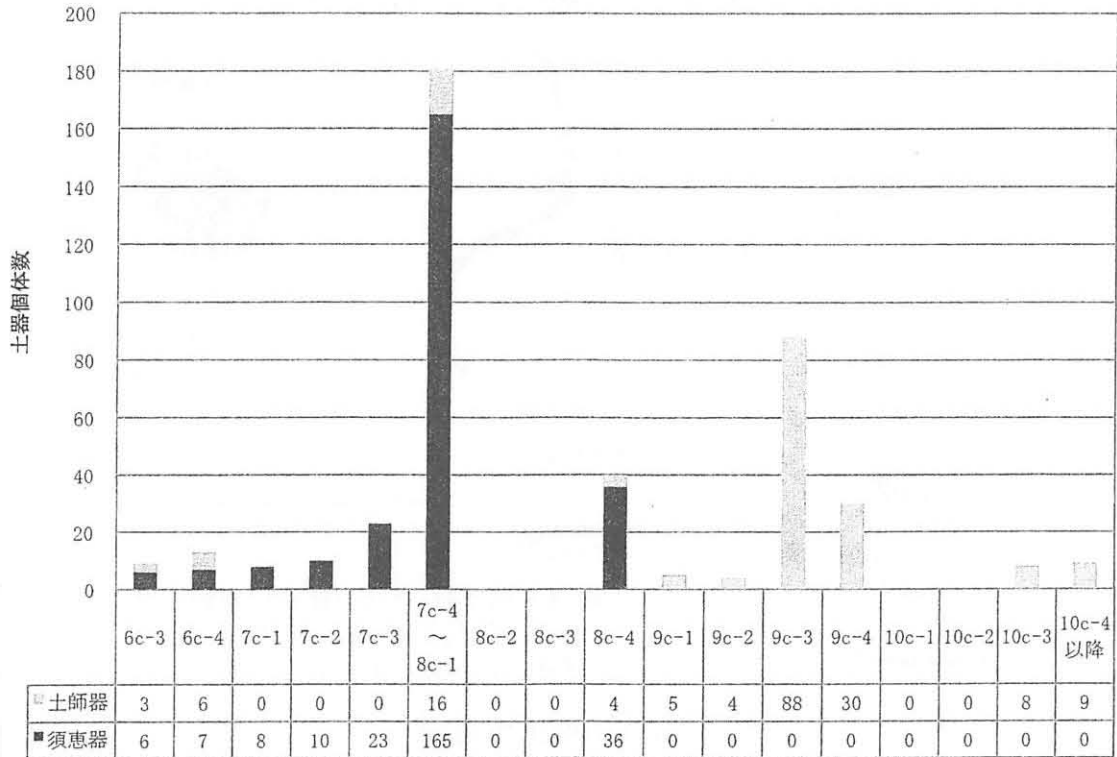


3. 出土土器(1/5)

(1:16号建物、2~5:64号建物)



4. 64号礎石建物出土瓦(1/6)

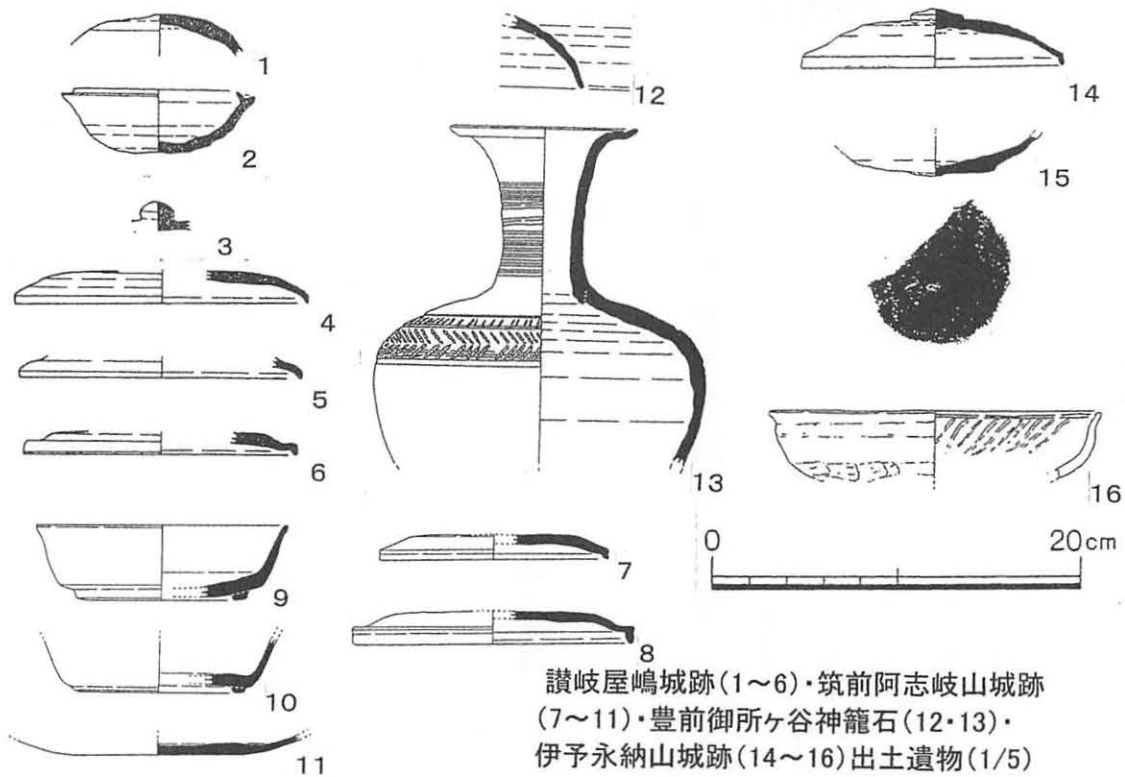


5. 鞠智城跡出土土器の時期別数量比較図

図6 肥後鞠智城跡の遺構と遺物

年代	大宰府政庁	水城西門	大宰府口城門	大野城建物群	鞠智城建物群	特記事項
7C第3	I期-古 I期-新	I期	I期	I期A 掘立柱式側柱	I期 掘立柱式側柱	7C第3
8C	II期-遺堂			I期B 掘立柱式総柱		
		I期C 礎石式大型総柱(長倉)	III期 礎石式総柱3×4(掘立柱併用・周溝)	8C 筑前・筑後・肥前国班給木簡		
9C	II期 礎石式朝堂院様式	II期	II期A 礎石式総柱3×5(基壇、掘立柱併用)		IV期 礎石式総柱3×4、掘立柱式側柱・総柱、掘立柱式八角形建物	9C 菊池城院不勳倉11字火
			II期B 礎石式総柱3×5・南北棟	III期 礎石式総柱3×4		
10C	III期 礎石式朝堂院様式	III期	II期C 礎石式総柱3×5・東西棟		V期 礎石総柱	10C
			III期 礎石式総柱3×4			
11C					11C	

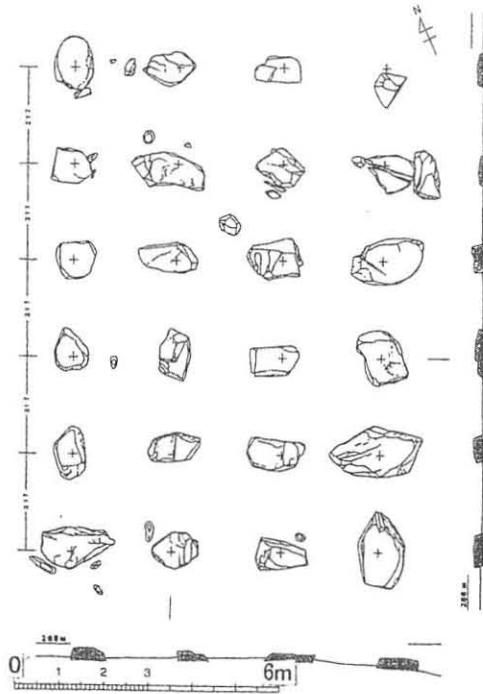
図7 赤司善彦の大宰府政庁・大野城・鞠智城の変遷図案



讃岐屋嶋城跡(1~6)・筑前阿志岐山城跡(7~11)・豊前御所ヶ谷神籠石(12・13)・伊予永納山城跡(14~16)出土遺物(1/5)

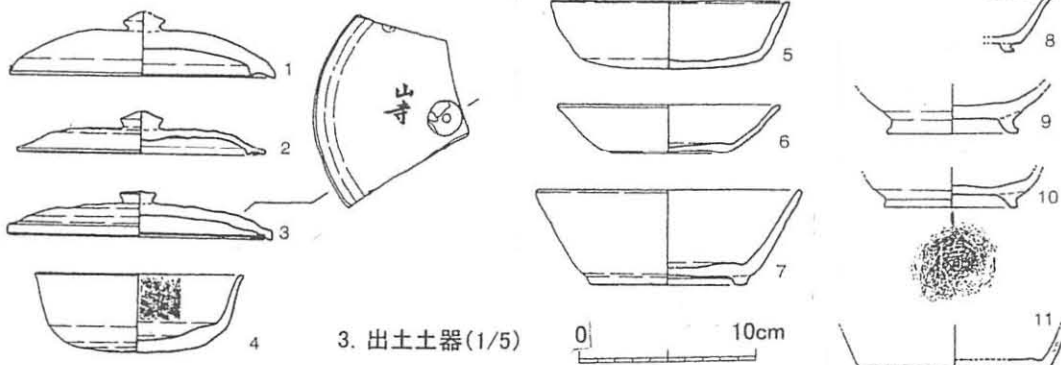
図8 古代山城出土遺物



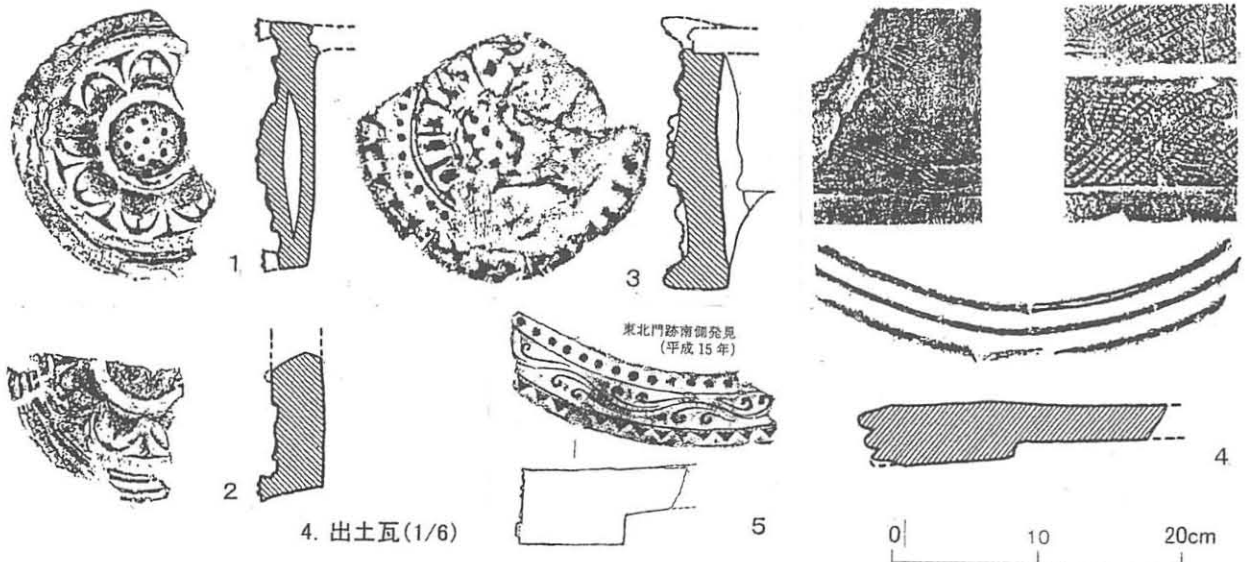


1. 基肄城跡全体図(1/15000)

2. 9地点礎石建物(1/200)



3. 出土土器(1/5)



4. 出土瓦(1/6)

図9 肥前基肄城跡の遺構と遺物





## 【講演①】

### 七世紀後半の国際関係と古代山城

仁藤 敦史（国立歴史民俗博物館教授）

## 【はじめに】

### ★高安城を素材に山城と大宰総領制の関係を考察

報告「七世紀後半の戦乱と高安城」第33回古代史サマーセミナー全体会報告「高安城とその時代」二〇〇五年八月二五日、於信貴山

拙稿「高安城からみた広域行政区画」（原秀三郎先生傘寿記念文集『学縁』、二〇一四年）

### ★広域行政区画として大宰・総領制を考察

拙稿「広域行政区画としての大宰総領制」（『国史学』二一四、二〇一四年）

### ★七世紀の外交的対立関係

拙稿「大化改新」と東アジア情勢『日本史かわら版』四、帝国書院、二〇一七年

## 【白村江後の倭国の立場】

唐軍の百済駐留

### →日本侵攻の現実的可能性(天智8・9年ごろ)

「征伐倭国」新羅本紀／「唐人所討」持統四年十月条

### →西日本各所に山城造営

「築長門城一、筑紫城二」（天智九年二月）四年八月条の重出説あり

- ・百済「兵法」（天智十年正月条）の導入
- ・天智十年に筑紫の防人が唐使を侵攻軍と誤解（彼防人驚駭射戦）
- ・広域行政組織整備と山城連動 国造軍から軍団兵士制への転換

### 大宰(筑紫・周防・伊予・吉備／畿内・東国)・国宰一評一五十戸体制

★高安城も畿内ないし倭・河内国を単位とする総領により造営管理されたか  
天智期における評の分立

国造の大規模評からの分立 ←百済役における国造軍の活動

防衛体制の強化と立評・評寺(白鳳寺院の全国的拡大増加)の関係

五十戸＝一里制を前提とした律令軍団制の導入(一里から兵士五十人)

庚午年籍(天智九年)に収斂される評の再編分立と五十戸編成

- ・近江遷都・倭京留守司(天智六年三月条)＝国土防衛

### ★唐・新羅は、百済滅亡後、高句麗征討に集中→高句麗滅亡→新羅の対唐戦争

663 新羅に鶏林州都督府を置き、全体を州県体制に組み込む

都督に金春秋の子、法敏を任命

664 新羅王弟金仁問と百済元王子扶余隆との和親誓盟

664 熊津都督に扶余隆(『旧唐書』百濟伝)

五部から州県制への再編—現地勢力の登用による懐柔策(『旧唐書』本紀・百濟伝)

665 新羅王法敏と劉仁願との誓盟により両国の境を決定(新羅本紀文武王十一年)

666 唐での**封禪の儀**

668 **高句麗の滅亡**、唐は安東都護府を平壤に置く

669 高句麗遺民の反乱→唐の州県化困難となる

670 新羅は高句麗遺民劍牟岑ケボウシと結び**対唐戦争へ転換**

新羅の対唐戦争は 671/6~676/11 676 に統一完成

677 唐は安東都護府を遼東半島へ移転

→朝鮮征服を断念し、新羅が大同江以南の統一

## 【天智期の外交】

### 天智四年(665)

唐『日本書紀』天智四年(六六五)是歳条

遣<sub>二</sub>小錦守君大石等於大唐<sub>一</sub>、云々。〈等謂<sub>二</sub>小山坂合部連石積・大乙吉士岐弥・吉士針間<sub>一</sub>。盖送<sub>二</sub>唐使人<sub>一</sub>乎。〉

★是歳、守大石・坂合部石積等を唐に遣わす **第⑤次遣唐使派遣?**

記載に混乱/官位表記の曖昧さ →親唐派による非公式の派遣か

★**翌年の封禪の会には時間的に間に合わない** 帰国は 12/14(『日本書紀』)

**遣唐使? = 国交回復のための全権大使? →送唐人使と百濟からの捕虜倭人国使か**

★**大唐へ行った守君大石と送唐使人境部連石積とは別使節、『書紀』が誤解し合叙か**

守君大石は百濟救援の將軍で帰国記事ないので唐の捕虜か 小錦という曖昧な位階

天智四年に唐へ送られた使節のうち境部連石積のみが帰国、守君大石の名前はない

実際の送使は大乙吉士岐弥・吉士針間

坂合部連石積は白雉四年から天智六年まで在唐か—天智四年の出発不可能

天智六年十一月乙丑条に石積の帰国記事 白雉四年以後の帰国記事なし

★**劉仁軌に率いられた百濟在留捕虜の「倭人国使」元將軍守君大石は唐に残留**

**留学生の境部連石積が東都を出発した「倭国酋長」として封禪に参加後、帰国**

### 天智五年(666)

唐『冊府元龜』外臣部盟誓

麟德二年十月丁卯、帝發東都赴東嶽、……倭国及新羅・百濟・高麗等諸蕃酋長、各率其属扈從。

★**新羅・百濟・耽羅・高麗等四国酋長唐泰山の封禪に赴会す 正月五日(冊府元龜)**

『冊府元龜』に「古来帝王封禪、未<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>若<sub>レ</sub>斯之盛者<sub>一</sub>也」とある盛儀

★以下の史料と異なる内容—**耽羅と高句麗の異同**

『旧唐書』卷八四

麟徳二年、封泰山。仁軌領新羅及百濟・耽羅・倭四国酋長赴会。

『資治通鑑』卷二百一唐紀十七

劉仁軌以新羅・百濟・耽羅・倭国使者、浮海西還、会祠泰山

『冊府元龜』外臣部盟誓

高宗麟徳二年八月、開府儀同三司新羅王金法敏・熊津都尉(督)扶余隆、盟于百濟之熊津城。……於是、仁軌領<sub>二</sub>新羅・百濟・耽羅・倭国四国使<sub>一</sub>、浮<sub>レ</sub>海西還、以赴<sub>二</sub>泰山之下<sub>一</sub>

★劉仁軌は8/13の熊津での盟の後、新羅・百濟・耽羅・倭国四国使を連れて出発  
白村江の戦いに耽羅も関係(『旧唐書』劉仁軌伝「倭衆并耽羅国使、一時並降」)  
都督・刺史は12月に泰山集合の命令

**10/29に東都を出発した「倭国酋長」と劉仁軌に率いられた「倭人国使」は別**

★唐使に対する非積極的な対応 664から反唐的外交方針の転換—二面外交か

『善隣国宝記』所引元永元年中原師安勸文所引「海外国記」

今見<sub>二</sub>客等来状<sub>一</sub>者、非<sub>二</sub>是天子使人<sub>一</sub>、百濟鎮将私使

## 天智六年(667)

唐『日本書紀』天智六年(六六七)十一月乙丑条

百濟鎮将劉仁願遣<sub>二</sub>熊津都督府熊山県令上柱国司馬法聰等<sub>一</sub>。送<sub>二</sub>大山下境部連石積等於筑紫都督府<sub>一</sub>。

**劉仁願は前年からの高句麗征討に関与し、高句麗と日本の連携を阻止する使者か  
対高句麗戦の兵力集結を倭国は脅威と認識している可能性**

倭国高安城・讃岐国山田郡屋島城・対馬国金田城築城(天智六年十一月是月条)

★天智六年までは防衛拠点の構築記事あり、警戒態勢を維持

『日本書紀』天智元年(六六二)三月是月条

唐人・新羅人、伐<sub>二</sub>高麗<sub>一</sub>。々々乞<sub>二</sub>救国家<sub>一</sub>。仍遣<sub>二</sub>軍将<sub>一</sub>、掘<sub>二</sub>疏留城<sub>一</sub>、由<sub>レ</sub>是唐人不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>略<sub>二</sub>其南堺<sub>一</sub>、新羅不<sub>レ</sub>獲<sub>レ</sub>輸<sub>二</sub>其西壘<sub>一</sub>。

★倭国が高句麗に援軍を送った先例を警戒

前年には高麗からの救援要請の使者あり

## 天智七年(668)

新『日本書紀』天智七年(六六八)九月丁未条

中臣内臣使<sub>二</sub>沙門法弁・秦筆<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>新羅上臣大角干庾信船一隻<sub>一</sub>、付<sub>二</sub>東巖等<sub>一</sub>。

★『家伝』の「或人諫<sub>レ</sub>之」—鎌足・大海人の親新羅政策への反対論の存在

『日本書紀』天智七年(六六八)九月庚戌条

使<sub>二</sub>布勢臣耳麻呂<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>新羅王輸<sub>二</sub>御調<sub>一</sub>船一隻<sub>上</sub>、付<sub>二</sub>東巖等<sub>一</sub>。

**★新羅との通交が再開—新羅使と遣新羅使 異例なほど丁寧な扱い**

御調船を送ることにより和平を受け入れ朝貢を求める。

高句麗滅亡 9/12 が確実な段階で、半島支配の主導権を狙う新羅の思惑

**★高句麗滅亡により唐・新羅による倭国侵攻への恐怖緩和と新羅の対唐戦争の前提**

→新羅・倭国両国の協調連携の動き 反唐的立場を共通点(虚説)

**天智八年(669)**

唐『日本書紀』天智八年(六六九)是歳条

遣<sub>二</sub>小錦中河内直鯨等<sub>一</sub>、使<sub>二</sub>於大唐<sub>一</sub>。

又以<sub>二</sub>佐平余自信・佐平鬼室集斯等男女七百余<sub>一</sub>、遷<sub>二</sub>居近江国蒲生郡<sub>一</sub>。

又大唐遣<sub>二</sub>郭務悰等二千余<sub>一</sub>。×削除

**★第⑥次遣唐使、河内鯨等を唐に遣わす。**

**★郭務悰の記事は天智十年と重複→削除(池内宏・坂本太郎・鈴木靖民説)**

◆十一月、倭国使、唐朝に到り方物を献じる(『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三)。

倭国竝遣<sub>レ</sub>使献<sub>二</sub>方物<sub>一</sub>

◆翌年三月条に高句麗平定を祝賀する目的の使者とある 前年末からの使者派遣

遣唐使記事はいずれも是歳条で、不正確な記事のみ

**10月の高句麗滅亡以降、日本侵攻が現実化したこととの関連→急遽派遣か**

**★親新羅派の中臣鎌足十月に死去 →親唐派による遣唐使**

**天智八・九年には筑紫率に親唐派蘇我赤兄が在任**

天智七年七月(重複記事か)と天智十年六月に栗隈王の筑紫率の記事。

唐『三国史記』新羅本紀文武王下、文武王十一年秋七月二十六日条

国家(唐)は船艘を修理し、外には倭国を征伐するに託し、其の実は新羅を打たんと欲す

**★是歳、唐は日本遠征を計画、新羅が唐に反するのは翌年**

◆天智十年に「唐人所計」とあるのは、前年からの倭国征討の準備

天智九年、百濟救援の役に出征して捕虜となり、唐に抑留中の筑紫上陽咩郡の人大伴部博麻・土師富杼等四人と唐の情報を日本に伝えることを謀る

唐総管薛仁貴セジキの軍は日本遠征を準備していたか

**天智九年(670)**

唐『冊府元龜』卷九七〇外臣部朝貢三

倭国王遣<sub>レ</sub>使賀<sub>レ</sub>平<sub>二</sub>高麗<sub>一</sub>。

◆三月是月、倭国王、唐に遣使して、高句麗平定を賀す(『唐会要』『新唐書』)。

**親唐派による派遣か**

新『日本書紀』天智九年(六七〇)九月辛未朔条

遣<sub>レ</sub>阿曇連類垂於新羅<sub>一</sub>。

★遣新羅使② 新羅と唐へ新・唐戦争の状況把握のため使者

天智十年(671)

唐『日本書紀』天智十年(六七一)正月辛亥条

百濟鎮將劉仁願遣<sub>レ</sub>李守真等<sub>一</sub>上表。

★百濟鎮將劉仁願の名前を借りた使として李守真ら上表 7/11 帰国

668 三年前に劉仁願は配流<sub>一</sub>百濟鎮將不在(池内宏説) 熊津への博徳派遣と対応

天智六年以来、四年ぶりの使者 百濟遺民と唐は対立せず<sub>一</sub>旧百濟領の維持で一致

★この段階では百濟支援は唐支援と同義となる

★高麗・新羅と百濟(三部使人)・唐が倭国へ相互に外交攻勢

★熊津都督府の衰退、唐による百濟領の維持政策と倭国への警戒緩和

唐『日本書紀』天智十年(六七一)十一月癸卯条

对馬国司遣<sub>レ</sub>使於筑紫大宰府<sub>一</sub>言、月生二日、沙門道文・筑紫君薩野馬・韓嶋勝娑婆・布師首磐四人從<sub>レ</sub>唐來日、唐国使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、合二千人、乘<sub>レ</sub>船四十七隻<sub>一</sub>、俱泊<sub>レ</sub>於比智嶋<sub>一</sub>、相謂之曰、今吾輩人船数衆。忽然到<sub>レ</sub>彼、恐彼防人驚駭射戰。乃遣<sub>レ</sub>道文等<sub>一</sub>、預稍披<sub>レ</sub>陳來朝之意<sub>一</sub>。

唐軍の倭人捕虜・亡命百濟人送還か

威圧ではなく懐柔策、对新羅外交への牽制 唐本国ではなく都督府との交渉

→軍事援助の要請か 唐の援軍が対吐蕃戦の大敗により困難な時期

★671 大唐総管の薛仁貴が大軍の兵を新羅へ派遣 唐兵が百濟を救いに来る

(『三国史記』新羅本紀文武王十一年七月二十六日条)

仁貴の楼船竟に風帆に翼し、旗を連ね北岸を巡る。

この大軍の一部が倭国へ派遣か

新『日本書紀』天智十年(六七一)十一月壬戌条

是日。賜<sub>レ</sub>新羅王絹五十匹。・五十匹。綿一千斤。韋一百枚<sub>一</sub>。

★天智七年の使者よりも賜物多い 百濟旧領支配の黙認

新羅への賜物 671 →以後天武元年 672 における唐への武器援助への変化

★二面外交ではなく、この間に外交方針の転換か

前年 12 月の天智死去、10 月親新羅派の大海人出家 による外交方針の変化

天武元年(672)

唐『日本書紀』天武元年(六七二)三月壬子条

郭務悰等再拜、進<sub>レ</sub>書函与信物<sub>一</sub>。

新羅を討つため倭国との軍事同盟を迫る高宗の国書

◆菅原在良が隋唐以来、本朝に献じられた書例を調べたもの

「大唐(皇)帝敬問=日本国天皇-」の書と国書書函の題「大唐皇帝敬問=倭(和)王-書」  
(『善隣国宝記』所引元永元年四月二十七日「菅原在良勘文」、『異国牒状記』)

### 筑紫大津の客館に安置—入朝を認めなかった天智(反唐的立場)

二度目の国書—天智の死後に親唐的大友皇子への書か

唐『日本書紀』天武元年(六七二)五月壬寅条

以<sub>レ</sub>甲<sub>・</sub>冑<sub>・</sub>弓<sub>・</sub>矢<sub>—</sub>賜<sub>レ</sub>郭務儆等<sub>—</sub>。是日。賜<sub>レ</sub>郭務儆等<sub>—</sub>物。総合<sub>・</sub>一千六百七十三匹<sub>・</sub>  
布二千八百五十二端<sub>・</sub>綿六百六十六斤。

★郭務儆に、大量の甲冑・弓矢と<sub>・</sub><sub>・</sub>布<sub>・</sub>綿を賜る—唐との軍事的同盟の証

大友皇子は親百済・唐的立場か 前年12月に天智死去

以後702まで唐との交渉が途絶えるのは熊津都督府の滅亡と親唐派の没落(大友皇子)

→大宰総領・山城体制の存続と対応

#### ◆高句麗滅亡後の外交路線の対立—分裂外交

天武・鎌足・(天智)—反唐・親新羅的 大津(新羅僧行心)

大友皇子・蘇我赤兄—親唐・反新羅的 近江朝廷の立場 持統(大宝遣唐使)

#### ◆唐・新羅との国交回復時期—唐との正式な国交回復いつか?

666 唐への遣使「封禪の儀」① 白村江の捕虜と留学生による参列か

668 新羅と国交回復(新羅使・遣新羅使開始) ←高句麗滅亡 天智即位

670 唐への遣使「賀平高句麗」② 676まで新羅の対唐戦争

この間30年間唐との通交なし 親新羅外交

大宰総領・山城体制の維持 親唐派(大友皇子)による一時的な和平か

701 大宝遣唐使③

## 【大宰総領と国宰】

《惣領の設置時期・範囲・職掌》

・大宰と総領の異同

竺志惣領(長官)・大貳(次官)の任命記事(『続日本紀』文武四年十月己未条)

大宰=官司名 惣領=長官名の区別

・国司(国宰・宰)との上下関係

津田説—国の長官の別称

坂本説—国司の統括官司→通説化

東国国司と東国惣領 以後と異質

時期差—関晃説/国司統括官—藺田・坂元説

伊予惣領と伊予国司 按察使との類似→総領と国司の兼帯と書き分け

「以西諸国司等」(壬申紀)の内容と権限

筑紫大宰府と筑紫国の兼帯/天智期以前は西海道地域は筑紫一国

- ・時期 大化の改新－菫田説  
**白村江敗戦後**－早川・家令説  
 壬申の乱後 坂元・渡部説
- ・地域 西国のみ－八木・黛・坂元・直木説  
**全国**－坂本・菊地・八木・早川説
- ・職掌 行政－菫田・渡部・八木説  
**軍事**－坂元・森田・下向井説

#### ◆天智期

『日本書紀』持統五年正月丙戌条

詔曰、直広參筑紫史益、拜**筑紫大宰府典**以来、於今廿九年矣

★持統五年から29年前は天智元年 = 筑紫大宰の整備時期か 評司の詮議権

白村江の戦時にも「筑紫大宰帥阿倍比羅夫」（『続日本紀』養老四年正月庚辰条）

★天智期における国土防衛体制＝大宰惣領と朝鮮式山城の整備設置 壬申紀の国司

『日本書紀』天智六年十一月乙丑条

百濟鎮將劉仁願遣**熊津都督府**熊山県令上柱国司馬法聰等。送**大山下境部**連石積等於**筑紫都督府**。

★「筑紫都督府」の表記は、「熊津都督府」との対句表現により、筑紫大宰府を西海道諸国の上位に位置する軍事的性格を強調して表現したもののか

#### ◆天武・持統期

『日本書紀』天武元年六月是時条

其**筑紫大宰栗隅王**、与**吉備国守当摩公広嶋**、二人、元有**隸大皇弟**、疑有**反歟**、若有**不服色**即殺之

★「筑紫大宰栗隅王」と併記される「吉備国守当摩公広嶋」は吉備大宰総領か

『日本書紀』天武元年七月辛亥条

將軍吹負既定**倭地**、便越**大坂**往**難波**。以余別將軍等各自**三道**進、至**于山前**、屯**河南**。即將軍吹負、難波小郡而仰**以西諸国司等**、令**進官鑰・馭鈴・伝印**。

★播磨以西の国司(国宰)の権限(軍事権・財政権) 一時的縮小か

★壬申紀の国司－伊勢・美濃・尾張・河内 倭京留守司＝畿内 ←天智期の設置か

『日本書紀』天武八年三月条

**吉備大宰**石川王病之薨於吉備

①播磨国宰道守臣(天智朝－近江天皇之世)

→②吉備国守当麻広嶋(天武元年)

→③吉備大宰総領石川王(天武八年) 壬申の乱以降任命

『日本書紀』天武十四年十一月甲辰条

儲用鉄一万斤送<sub>二</sub>於周芳總令所<sub>一</sub>、是日、筑紫大宰請<sub>二</sub>儲用物、・一百疋、糸一百斤、布三百端、庸布四百常、鉄一万斤、箭竹二千連<sub>一</sub>、送<sub>二</sub>下於筑紫<sub>一</sub>

★周芳惣令所と筑紫大宰 軍事物資の集積

大宰=官司名 惣領=長官名の区別

長官のいる所=「周芳大宰惣令所」の意 「筑紫將軍所」(崇峻五年十一月条)

筑紫大宰府=この他にも地名+大宰が存在か 吉備大宰

『日本書紀』持統三年八月条

詔<sub>二</sub>伊予總領田中朝臣法麿等<sub>一</sub>曰、讚吉国御城郡所<sub>レ</sub>獲白莫、宜<sub>二</sub>放鷹<sub>一</sub>焉

★伊予總領田中朝臣法麻呂 讚岐国御城郡への命令

伊予国司田中朝臣法麻呂 宇和郡からの献上(持統五年七月庚午条)

★大宰總領と国司の併任例か

「御城郡」は隣接した山田郡の屋島城と関連

『日本書紀』持統四年七月辛巳条

大宰・国司皆遷任焉

#### ◆文武期

『続日本紀』文武四年(七〇〇)六月庚辰条

薩末比売・久売・波豆、衣評督衣君梟、助督衣君互自美、又肝衝難波、從<sub>二</sub>肥人等<sub>一</sub>、持<sub>レ</sub>兵剽<sub>二</sub>劫覓国使刑部真木等<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>是勅<sub>二</sub>竺志惣領<sub>一</sub>、准<sub>レ</sub>犯決罰

『続日本紀』文武四年十月己未条

以<sub>二</sub>直大壺石上朝臣麻呂<sub>一</sub>為<sub>二</sub>筑紫惣領<sub>一</sub>。直広参小野朝臣毛野為<sub>二</sub>大貳<sub>一</sub>。直広参波多朝臣牟後閉為<sub>二</sub>周防惣領<sub>一</sub>。直広参上毛野朝臣小足為<sub>二</sub>吉備惣領<sub>一</sub>。直広参百濟王遠宝為<sub>二</sub>常陸守<sub>一</sub>。

★文武四年六月に竺志惣領-薩摩・大隅の土豪に処罰命令

十月に竺志惣領(長官)・大貳(次官)／周防惣領・吉備惣領／常陸守

『続日本紀』文武二年七月癸未条

以直広肆高橋朝臣嶋麻呂為<sub>二</sub>伊勢守<sub>一</sub>。直広肆石川朝臣小老為<sub>二</sub>美濃守<sub>一</sub>。

★美濃・伊勢国司も大山位(天武四年条)-勤位-六位クラスより上位

大宰總領や常陸と同じく直位-五位クラス 總領的国司の存在

伊賀(天武朝に分立)・志摩・飛驒国など周辺の下国的諸国との関係

→白村江敗北以降に、美濃・尾張では西国大宰總領と同様な動員体制

#### ◆大宰總領制と山城

筑紫-西海道(筑紫国)

水城・大野城・椽(基肆)城・鞠智城

帯筑前国

対馬国金田城

周芳-安芸 長門は独立?

長門城



伊予－讃岐(土佐・阿波?)	讃岐国山田郡屋島城 ←御城郡(含山田郡か)
吉備－吉備・播磨	鬼ノ城
畿内－河内・大和(摂津・山背?)	高安城
東国－東国全体(東方八道)	天武の信濃遷都計画 新城と難波京の三京

★白村江敗戦以降順次整備

天智期の朝鮮式山城築城記載と神籠石系山城(鬼ノ城)の時期差ありや

★大宰府が庚午年籍七七〇巻を直接管理 →令制国の非存在

★山城と大宰

『続日本紀』文武二年五月甲申条

令<sub>三</sub>大宰府繕<sub>二</sub>治大野・基肆・鞠智三城<sub>一</sub>

「大宰府出土木簡」(『日本古代木簡選』五〇〇号) 天平期

為<sub>三</sub>班<sub>二</sub>給筑前・筑後・肥等国<sub>一</sub>遣<sub>二</sub>基肆城稻穀<sub>一</sub>随<sub>二</sub>大監正六上田中朝□□□<sub>一</sub>

★大宰府と山城の密接な関係

大宰府と三城(肥後国菊池城院－文徳実録／肥前国基肆郡) 広域行政

大宰府大監が基肆城稻穀を筑前・筑後・肥(前)等国に班給

★畿内(河内・大倭)と東国(常陸)の広域行政ブロックの可能性 →按察使へ継承

壬申の乱における畿内・美濃・尾張および東国からの迅速な兵力動員体制

## 畿内国司

畿内－「畿内」国司・「畿内」国(大化二年) 河内国司守と倭京留守司

高安城に「畿内」の田税(天智八年)

東国・「倭京」・筑紫・吉備へ興兵使(壬申紀) 倭京留守司と小墾田兵庫

「畿内」国司の任命(天武五年)

高安城の雑儲物を「大倭・河内」に移動

★四至畿内(孝徳期)→四畿内(天武・持統期)

用語は持統六年／四国名は天武四年

★高安城に畿内の田税／穀と塩／大倭と河内二国へ雑儲物を移動－広域行政と軍事

天武朝に周芳惣令所と筑紫大宰へ「儲用物」の送付例 →軍事物資か

壬申紀の国司－伊勢・美濃・尾張・河内 倭京留守司＝大和

## 【おわりに】

七世紀後半における広域行政組織としての大宰(官司)・総領(長官)制の存在

大宰府の帯筑前国と同じような大宰の帯国制度－国宰の統括官司 国司とも表現される

孝徳期－畿内国司と東国国司 国を超える広域行政官／立評を担当 下位の国司なし

天智期－筑紫大宰 対外防衛と辺要地域の行政

周芳大宰・伊予大宰(越智郡の立郡)・吉備大宰

天智～天武期－国宰の分離と併存 西国(壬申紀)から東国(天武五年)へ展開か

持統期－大宰・国司の併存／六年サイクルの交替制度開始

律令期－大宰と山城の廃絶 西海道大宰府のみ残存

山城との密接な関係－対外的緊張による軍管区として機能 →在地支配の拠点

『日本書紀』天武元年六月丙戌条

筑紫国者元成<sub>二</sub>辺賊之難<sub>一</sub>也。其峻<sub>レ</sub>城深<sub>レ</sub>隍、臨<sub>レ</sub>海守者、豈為<sub>二</sub>内賊<sub>一</sub>耶。今畏命而發<sub>レ</sub>軍、則国空矣。

## 参考文献

池内宏「百済滅亡後の動乱及び唐、羅、日の関係」(『満鮮史研究』上世第二冊、吉川弘文館、1960)

坂本太郎「天智紀の史料批判」(『日本古代史の基礎的研究』上、東京大学出版会、1964)

鈴木靖民「百済救援の役後の百済および高句麗の使について」(『日本歴史』241、1968)

大和岩雄『古事記と天武天皇の謎』大和書房、1969

鈴木靖民「百済救援の役後の日唐交渉」(『続日本古代史論集』上、1970)

松田好弘「天智朝の外交について」(『立命館文学』415・6、1980)

直木孝次郎「近江朝末期における日唐関係の一考察」(『末永雅雄先生米寿記念献呈論文集』、奈良明信社、1985)

鬼頭晴明「壬申の乱と国際的契機」(『千葉史学』13、1988)

新藤正道「白村江の戦い後の天智朝外交」(『史泉』71、1989)

下向井龍彦「日本律令軍制の形成過程」(『史学雑誌』100-6、1991)

森公章『白村江以後』講談社選書メチエ、1998

盧泰敦『古代朝鮮 三国統一戦争史』岩波書店、2012

川本芳昭「白村江の戦いと古代東アジアにおける世界秩序の変動」(『文明研究・九州』11、2017)

早川庄八「律令制の形成」(『天皇と古代国家』講談社、2000、初出1975)

狩野久「山城と大宰・総領と「道」制」(『永納山城跡－平成14年度～16年度調査報告書－』西条市教育委員会、2005)

狩野久「瀬戸内古代山城の時代－築造から廃止まで－」(『坪井清足先生卒寿記念論文集』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会、2010)

鈴木拓也「文献からみた古代山城」(『条里制・古代都市研究』26、2010)

【講演②】

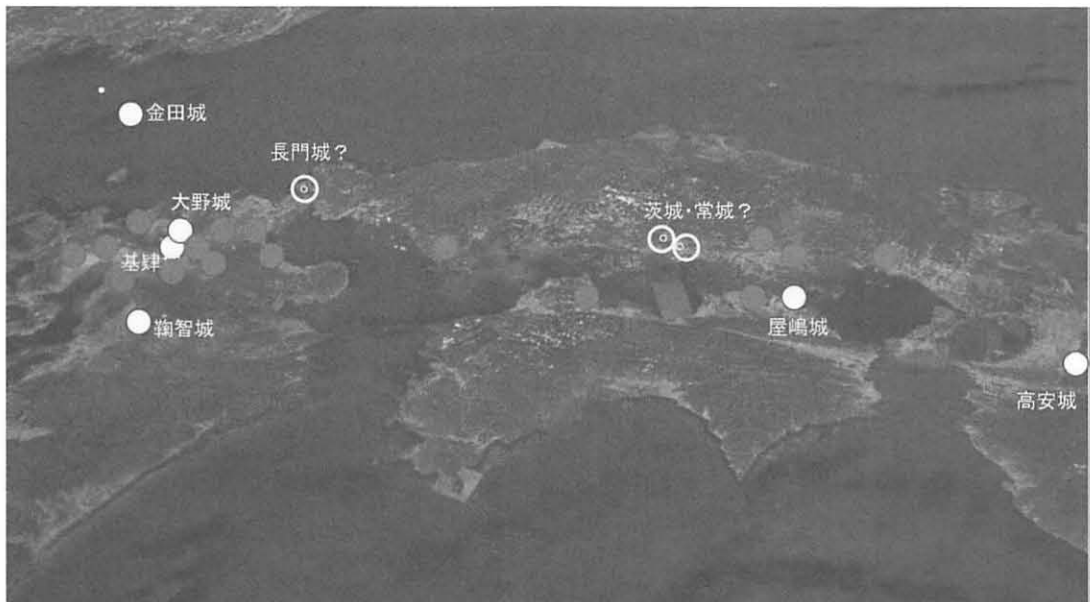
朝鮮式山城の特徴 —主に兵站と備蓄について—

赤司 善彦（大野城心のふるさと館長）

はじめに

文献に記載のある朝鮮式山城と、記載のない神籠石系山城という分類がなされて久しい。近年では、各地で古代山城の調査が進展し、この分類は学史的な用語として扱われ、全ての山城を共通の事項で検討することが定着してきた。ここでは朝鮮式山城に限った特徴を示したい。『日本書紀』・『続日本紀』記載いわゆる朝鮮式山城は以下の12城である。

長門城	天智4（665）年築	所在地不明（山口県）
大野城	天智4（665）年築・文武2（698）年繕	福岡県大野城市・太宰府市・宇美町
基肄城	天智4（665）年築・文武2（698）年繕	佐賀県基山町、福岡県筑紫野市
金田城	天智6（667）年築	長崎県対馬市
屋嶋城	天智6（667）年築	香川県高松市
高安城	天智6（667）年築・天智9（670）年修・文武2（698）年修 大宝元（701）年廃	大阪府八尾市、奈良県平群町・三郷町
三尾城	天武元（672）年陥	所在地不明（滋賀県）
鞠智城	文武2（698）年繕	熊本県山鹿市・菊池市
三野城	文武3（699）年修	所在地不明（福岡県）
稻積城	文武3（699）年修	所在地不明（福岡県）
常城	養老3（719）年停	所在地不明（広島県）
茨城	養老3（719）年停	所在地不明（広島県）



第1図 古代山城分布図

『日本書紀』によれば、663年の白村江敗戦の翌年に、対馬・杵岐両島と北部九州の沿岸部を中心に防人（さきもり）と烽（とぶひ）を配置し、同時に九州北部の筑紫に水城を築造。その翌665年には瀬戸内への関門である長門、筑紫に大野城・椽（基肆）城と、さらに2年後には近畿の高安城と瀬戸内の屋嶋城、対馬に金田城を築いたと記す。戦略としては、まず防人による海浜警備と、通信網となる烽火の体制を整えたのである。次に太宰府地域に内陸の防衛拠点を形成して、さらには対馬から瀬戸内そして畿内の王都に至るまでの陸路・海路の主要幹線に多重防御線を敷いたと解釈できる。

さて、上記のように文献記録に表れる城は665年の長門国の城・筑紫国の大野城・基肆城の築城に始まり、7世紀末の修復時期を経て、719年の茨城・常城の廃城記事にみられるように8世紀前半には終焉を迎えている。このように7世紀後半の築城から7世紀末の修繕、そして8世紀前半には廃城という短い存続期間がおおまかに文献記録からは窺える。ところで、築城期が天智朝にあることから、「天智紀」あるいは「天智朝期」山城と呼ばれることもある。史料に名称が記載されていたのは、編纂された段階で戦略的に維持する必要のある城だったからだと思われる（狩野久「西日本の古代山城が語るもの」日本歴史月報21 2015）。

## 1 朝鮮式山城とは

663年の白村江の敗戦後、朝鮮からの来襲をおそれた日本政権が国土防衛のため築造した山城。北九州から瀬戸内海沿岸の重要地点に、亡命百済人の指導で朝鮮様式に築かれた。筑紫国大野城・基肆城、対馬島金田城・讃岐国屋嶋城・大和国高安城などがある。多くは標高300～400mの急峻な地形にある。稜線に沿って石塁または土塁を築き、城内に倉庫群があり、谷間に溪流が流れるか泉があるのが特徴。なお北九州・瀬戸内地方に分布し、宗教施設と考えられてきた神籠石は、近年の発掘調査によって古代の山城遺構であることが確定的となった。（百科辞典マイペディア 平凡社）

**朝鮮式山城の名称はいつから用いられたのか** 大野城・基肆城の認識は貝原益軒の『筑前国續風土記』（1706年）の中で、大野城は「四王寺山、則大野城なる事明らかなり」、基肆城については「坊中山というは・・・椽城を築せ玉ふ」と記す。また、文化三（1806）年制作の『太宰府旧蹟全図』には両城の城壁線が描かれている。このように近世の史料には両城が現在地に比定されていることが知られていたが、明確に意識されるようになったのは明治時代の後半以降のことである。

明治31年に久留米市高良山を取り巻く列石遺構が神籠石の名称で中央の学界に報告された。その後も雷山や女山などの列石遺構が発見されたことで注目が集まり、その性格をめぐって城郭説と霊域説とに分かれたいわゆる神籠石論争が始まった。この長い論争の中であらためて大野城や基肆城に注目が集まった。

実は両城については史料に関心のある人間には知られていたが、遺跡の現状を実地踏査する人はいなかったようで、大正元年に関野貞氏の実地調査を皮切りに多くの人に現状が

知られるようになった。関野貞氏は実地調査した翌年、朝鮮半島各地の古代山城を「朝鮮式山城」と呼び、その特色を示すとともに、大野城・基肆城は朝鮮式山城の形式と同一であり、百濟人の関与があったことから朝鮮式であることは当然とだと記す（「所謂神籠石は山城址なり」『考古学雑誌』4-2 1913）。そして天智朝期の金田城や屋嶋城、高安城なども朝鮮式山城であろうとみなした。神籠石が山城であるというのが趣旨ではあったが、神籠石と区別して朝鮮式山城の名称が用いられた。その後「上代九州山城」などの名称も用いられることもあった。

戦後、九州考古学をリードした鏡山猛氏がいわゆる朝鮮式山城の研究を行い、昭和 34 年度文部科学研究費による総合研究のテーマ名は「西日本に於ける朝鮮式山城の研究」であり、鏡山氏の論考で朝鮮式山城の名称が広く浸透していった

## 2 朝鮮式山城の特徴

**立地** 立地は、全て官道成立以前の古い交通路が近くにあるなど、交通の要衝となる場所に位置している。金田城は対馬中央の浅芽湾に面し、屋嶋城は瀬戸内海に面しともに船舶の寄港に最適の地である。なにより全ての山城が見晴らしのよい高所を取り込むことが多い。

**土塁** 城壁は、谷を取り込み規模が大きい。また城壁線は全周するのではなく自然の急崖を利用する場合が多い。土塁は丘陵尾根線の少し下がった傾斜部に片壁式（内托式）にもたせかけて構築することが多い。尾根線に両壁式（挟築式）で土塁を築き上げるより、工法上簡略化できることが大きい、高所を城壁内側に置くことの優位性も大きい。

構築方法は、まず土塁構築する地面を段切りして基礎盛土を行い、その上に版築による築土をおこなう。作業工程上、受け持ちの範囲が決まっていたと思われるが、土塁正面から見たとき区切りのない連続的な版築に見えることが多い。

大野城では 1m 前後の厚さで築土の単位が認められる。版築のための土塁前面の堰板柱穴は直線的に伸び、間隔は 2 m 前後である。一部で土塁に補強の盛土がある。また、土塁下部に列石を有する土塁の例もある。

**石積** 総石垣の石塁と内部が盛り土の貼り石垣がある。基本は一定の規格性のある自然石あるいは野面（板石・玉石）の割石を予め揃えて、布目地だけでなく縦目地も意識した乱積みとする。現地で採取した石材を用いる。横目地の単位が 1 m 弱～1.5m で認められる。横目地は築石だけでなく、内部もこれに合わせて平坦面が認められ、大野城では接続する土塁の積み土と対応していた。この時に作られる平坦な上面は、作業の通路として機能していたものか。接合面は現場での部分調整（合端合わせ）をおこなう。隙間はあるが小石で埋めることはしない傾向にある。築石の背後に栗石より大ぶりで控えの長い石材を積んでいるところもある。

**施設** 城壁には水門や突出部あるいは一部に堀切が伴うことがある。また、城壁で最も重要な施設が出入りとなる城門で、掘立柱式や礎石式の建物が設置される。城門の礎石には

学史的な分類	山城名	時 期			
		7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
朝鮮式山城	大野城	■	■	■	■
	基肆城	■	■	■	■
	金田城	■	■	■	■
	屋嶋城	■	■	■	■
	高安城	■	■	■	■
	鞠智城	■	■	■	■
(瀬戸内の山城)	播磨城山城	■	■	■	■
	大廻小廻山城	■	■	■	■
	鬼ノ城	■	■	■	■
	讃岐城山城	■	■	■	■
	永納山城	■	■	■	■
	石城山神籠石	■	■	■	■
(九州の山城)	御所ヶ谷神籠石	■	■	■	■
	阿志岐山城	■	■	■	■
	高良山神籠石	■	■	■	■
	雷山神籠石	■	■	■	■
	女山神籠石	■	■	■	■
	鹿毛馬神籠石	■	■	■	■
	帯隈山神籠石	■	■	■	■
	おつぼ山神籠石	■	■	■	■
	杷木神籠石	■	■	■	■
	唐原山城	■	■	■	■
備考	■ 出土遺物などからみて確実 ▨ 可能性がある ▩ 出土遺物はあるが極少量であるなど不確実				

第1表 古代山城の出土土器からみた存続時期

建物の柱や門扉の軸、方立を受ける仕口があり、掘立柱に伴う唐居敷もある。門の床面は段差のないのが一般的だが、前面に段差のある懸門構造や、石敷きの階段を設けたものもある。また、城門強化のための半円形の城壁である甕城も一部で確認されている。

城内では兵舎や兵庫とおもわれる建物や、後述する稲穀を貯積したとみられる多数の倉庫群が確認されている。そのほかに井戸・貯水場・工房などが確認されている。ただし、朝鮮半島の山城で通有の人工的な貯水遺構はまだ発見されていない。

**築城と存続時期** 出土土器や瓦から7世紀後半に築城されたことは確実である。土壘や石壘の構造も類似点が多い。ほとんどの山城が8世紀には廃城となるが、大野城と基肆城、鞠智城、高安城は8世紀後半以降も存続している。考古学の成果からみると、山城の消長を示す土器や瓦等の遺物は非常に少なく、第1表に示した通りであるが、確実なところで7世紀後半～8世紀前半と考えられる。このようにほとんどの山城は、文献史料と同じく8世紀前半で役割が終わったと考えられる。ところが近畿の高安城と九州の大野城・基肆城・鞠智城のみは、8世紀後半以降も存続していることが確実である。この三つの山城は698年に大宰府が大野城・基肆城・鞠智城を修理した城である(『続日本紀』)。また、718年の養老衛禁律には「筑紫城」に不法侵入した場合の罰則がある。この筑紫城は九州のこの3つの山城を指すと考えられている。

### 3 古代山城の兵士

奈良時代の律令制下では、戸籍に基づく徴兵制が敷かれ、徴発された一般農民出身の兵士は各国ごとの軍団に編成される。太宰府市国分松本遺跡から、7世紀末の戸籍に関する木簡が出土した。現在の福岡市西区・糸島市にあたる嶋評の戸籍で「兵士」の文字があっ

た。戸籍の作成は一般農民から兵を徴発する基盤である。白村江での敗因ともいうべき豪族軍主体の軍事編成に変えて、新たに国家統制のとれた軍団制への移行が文献史学で説かれていたが、これを7世紀末段階で裏付ける資料となった。

九州北部を中心とする大宰府管内では、防人制がこれに加わる。つまり外的な防備は天智朝期に成立した防人制が続いており、奈良時代の西海道の軍制は、防人制と軍団制との2本立てが特徴である。防人は主に対馬・壱岐・筑紫の沿岸部で国境警備のために配備された兵士で、8世紀中頃以降に西海道が負担するまで、東国の出身者を中心に3千人ほどが徴発されていた。その配備地は、「防」という施設で、「さきもり」の読みからして岬などの沿岸部とみられる。佐賀県唐津市中原遺跡出土の「甲斐国」・「戍」銘木簡は、防人が肥前国の沿岸にも配置されていたことを示すだけでなく、8世紀末に、東国防人廃止後も現地に留まっていた東国防人の実在を示す資料である。これら防人が配備された「防」や「戍」の遺跡はまだ明らかではないが、中世の元寇防塁にみられるように海辺での防衛ラインが想定されていたとみられ、内陸の山城も守護の対象として兵士が常駐していたと考えられている（鈴木拓也「軍制史からみた古代山城」『古代文化』61-4 2010）。

さて、山城の維持管理は本来は所在国の国司が担っていた。大野城は筑前国。基肄城は肥前国、鞠智城は肥後国となる。各国司の管轄下に置かれた軍団が平時には国府と併せて山城の警固も担っていたのであるが、大野城の場合は大宰府が直接関わっていった。西海道（九州）には、西海道を統括し対外的な交流や防備を担った大宰府が大野城の南麓に置かれた特殊事情があった。大宰府管轄下のみは各国から交代勤務で集められた軍団兵士が常駐していた。彼らが大宰府の諸官衙をはじめ大野城を守護するなど、大宰府常備軍の母体をなしていたと考えられている（松川博一「大宰府軍制の特質と展開—大宰府常備軍を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』37 2012）。このように防人もしくは軍団兵士が古代山城の警固や修繕などを担っていたと考えられるがその人数や実態は不明な点が多い。

#### 4 朝鮮式山城の兵站機能

古代山城は軍事施設であるので、多くの人が要塞としての機能を思い浮かべると思われるが、実態はほとんどわかっていない。昔から大野城は大宰府の官人や周辺農民の逃げ城だといわれてきた。籠城したとしても唐や新羅軍が圧倒的に強く攻め込まれたら助からない確率が高い。それならば、地の利に長けている地元の農民であれば、敵が来ないように奥深い山中に身を潜めてやり過ごした方が助かるのではないだろうか。そもそも朝廷が一般農民を救う根拠史料も希薄であり、もっと考慮すべきではないかと思う。多数の一般農民の籠城を本気で想定した築城とは、施設面や防御面でとても思われぬ。住民の保護とはかけ離れたところで山城は築城されているようだ。

ではどのような機能が想定されたのだろうか。古代山城の築城後、幸い唐・新羅軍との戦争は現実には起こらなかったもので、本当のところはわからない。『日本書紀』の戦闘記事を分析した小嶋篤氏によれば、山城や砦などの防御施設主戦場にした戦闘は乏しく、最も

重視されたのは交通路の封鎖であり、峠（関）、河川（渡河地点）、港（上陸地点）を迎撃地点として陣を構えて、弓矢による戦闘が主体をなしていたという。さらに壬申の乱での三野城と高安城を舞台にした使われ方も踏まえて、古代山城は戦場となることを想定しておらず、兵士を派兵するための集結場所、供給する兵糧・武器の守衛、高所からの敵軍把握が想定されていたと推測している（小嶋篤「鞠智城築造前後の軍備」『鞠智城と古代社会』4 熊本県教育委員会 2016）。

山城が高所に位置しているのは、防御に適しているからである。斜面を登るといのは攻めにくい。さらに眺望がきく利点がある。では高ければどこでもよいかというとそうではなく、選地には意味がある。大集団の軍隊は交通路を進んで攻め込んでくるので、その交通路の要所で迎撃する戦略である。その場所に近接した位置で眺望がよく、さらには攻めにくい複雑な地形の山が選ばれているのである。高所であれば敵軍がスルーすればよいのではないかと考える人もいるが、通過後、野営場を背後から攻撃される恐れがあり無視はできない。つまり攻守の適地が選ばれているのである。事実、古代山城は先述したように古代の主要幹線に接した位置に築城されている。古代山城は戦闘時に迎撃のために駐屯し、作戦に必要な兵士、武器・武具、食料などの補給や整備、そして監視による連絡という兵站機能が重要視されていると考えられるのである。

大野城や鞠智城で築城時の建物がいくつか確認されている。それらは兵舎やその関連施設とも解釈されてはいるが、仮に数百名単位での常駐を考えると、あまりにも少ない。『類聚三代格』貞観十二（870）年と貞観十八（876）年には大野城の倉庫は「城庫」と呼ばれ、守衛兵士に支給する米や武器武具を収納していたことがわかる。大野城の兵站機能を裏付けるものであるおそらく築城時の建物がこうした兵站の倉庫だったとみられる。ところが、武器となる鞠智城での鉄鏃の出土例を唯一として皆無である。平時の警備や訓練で使用によって破損した武器・武具も見いだせないのである。大野城は面積 200ha 近い広さである。廃城された段階もしくはその後にはひとつ残らずきれいに持ち去られたとする可能性はない。落としたものなども含めてすべての痕跡を消し去ることは不可能であろう。であれば、平時には城内への多量の武器類の持ち込みはなかったということかもしれない。武器武具をなどの鉄製品を制作していた鍛冶遺構もないことから、すべての武器武具は外から運び込まれたと考えられる。もちろん、兵士は最小限度の武器は携帯していた。

軍防令では徴発された兵士は武器類を各自自ら用意して備えることとされていた。各自が弓 1 張と弓矢 50 隻、大刀 1 口などの武器のほか、行軍や野営に必要な飯袋、水桶あるいは刀子や砥石などの工具も携帯させ、これらが欠けたり少なかったりしてはならないと定められていた。つまり戦闘時には、大量に使用される弓矢など消耗品は、そのつど外部から運び込まれ、平時には必要最小限度の武器類が収納されていたと思われる。

松川氏によると、大宰府での大量の武器類は大宰府政庁の付近に設置された兵庫に備蓄されていたとみている（前掲書）。近年、大宰府政庁の西に隣接する蔵司地区では大型礎石建物とともに複数の高床倉庫建物が存在し、さらには戦闘用の矢（鉄鏃）を主体にした大

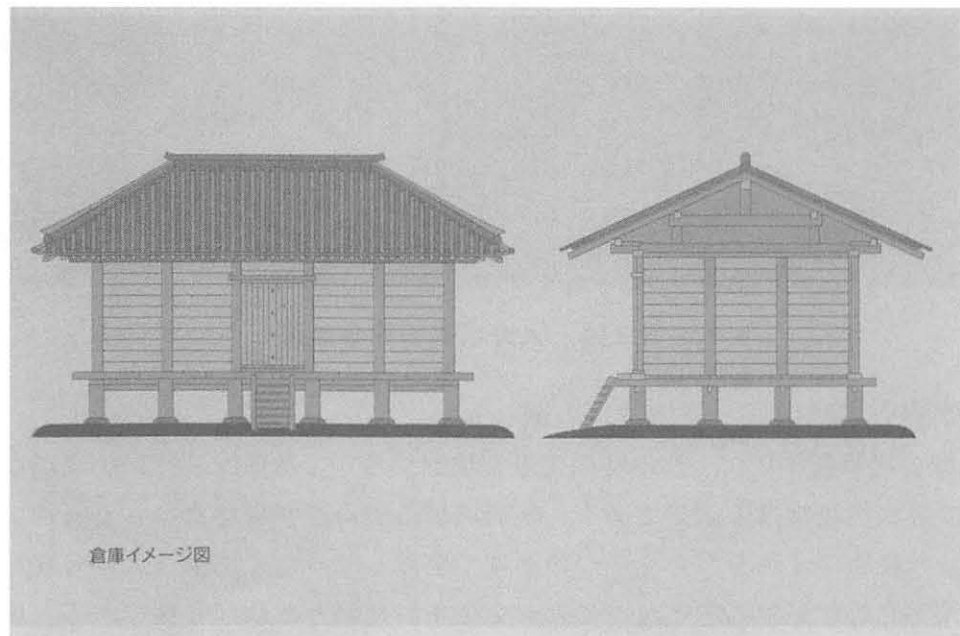


量の武器や甲冑などの武具類が集積されていたことが分っている。大宰府での厳密な管理下で大野城は必要最小限度の兵站機能を担っていたと結論できる。では山城の倉庫はすべて兵站機能かという、そうではない。

## 5 筑紫城の存続と備蓄

朝鮮式山城のうち大宰府管轄下の山城は「筑紫城」と呼ばれていた。その大きな特徴は、城内で多数の建物が築造されていたことである。大野城ではこれまでに9か所で49棟の高床倉が確認された。最も棟数の多い建物は、短辺が3間（柱と柱の間の数）で、長辺が5間の礎石式の高床倉である。奈良時代の前半頃から末頃まで順次建て続けられていた。これが総計で約35棟を数える。南の基肄城でも同一の倉が、約35棟あったと考えられる。鞠智城ではこれまでに72棟が確認されている。少なくとも構造と主軸方位が判明しているものは62棟である。このうち掘立柱建物は側柱建物が25棟、総柱建物が13棟造営されている。礎石建物は21棟で、20棟が総柱建物である。このほかに、日本の古代山城では初めて検出された八角形建物がある。八角形建物は掘立柱式と礎石式がある。

共通する建物の特徴を探してみたい。礎石建物では大野城と基肄城では8世紀前半以降に3×5間の規格化された総柱建物が造営され、早くとも8世紀末頃以降で9世紀を主な時期として3×4間の総柱建物が造営されている。鞠智城では3×5間は確認されていないが、3×4間は確実なところで9棟である。総柱建物が20棟であることからすると約半数を3×4間の総柱建物が占めていることになる。なかには、柱間寸法が七尺等間で、大型の礎石を用いているところも大野城の3×4間と共通する。



第2図 3間×5間の倉庫建物

次に、大規模な総柱式の高床倉庫の存在も、共通する特徴である。鞠智城では3×9間の規模で、基壇を有す格の高い建物である。大野城では、3×8間以上の建物が最も見晴らしの良い主城原地区に建てられ、基肆城では大礎石群と呼ばれる3×10間の建物が、倉庫群の中で最も高い場所に造営されている。大野城の重複関係では、3×5間の倉庫に先立って造営されていたことが判明している。倉庫の礎石化はまさに倉庫景観の中心となるような場所に建てられることから始められている。先行研究の成果を援用すれば、郡衙正倉には、一般的な倉庫とは異なる長大な規模や瓦葺きあるいは基壇を有すなどの高質な倉庫が1つもしくは複数設置される特定の倉庫があり、これは法倉の可能性が高いとされる。法倉は飢饉などの大災害や天変地異が起こった際に、民衆を救済するため賑給用の稲穀を納めた特別な倉とされる。

なお、大野城・鞠智城そして高安城にのみ、礎石の周囲に掘立柱を巡らせた礎石・掘立柱併用建物が確認できている。8世紀前半頃の造営で、他の倉庫より高品位と考えられる。



第3図 大野城礎石式倉庫跡

## 6 大宰府と古代山城（筑紫城）の関わり

筑紫城の建物について、その時期変遷を検討するが、基肆城は発掘調査が実施されていないので掘立柱建物は未確認である。地表に残る礎石を手掛かりにするだけである。

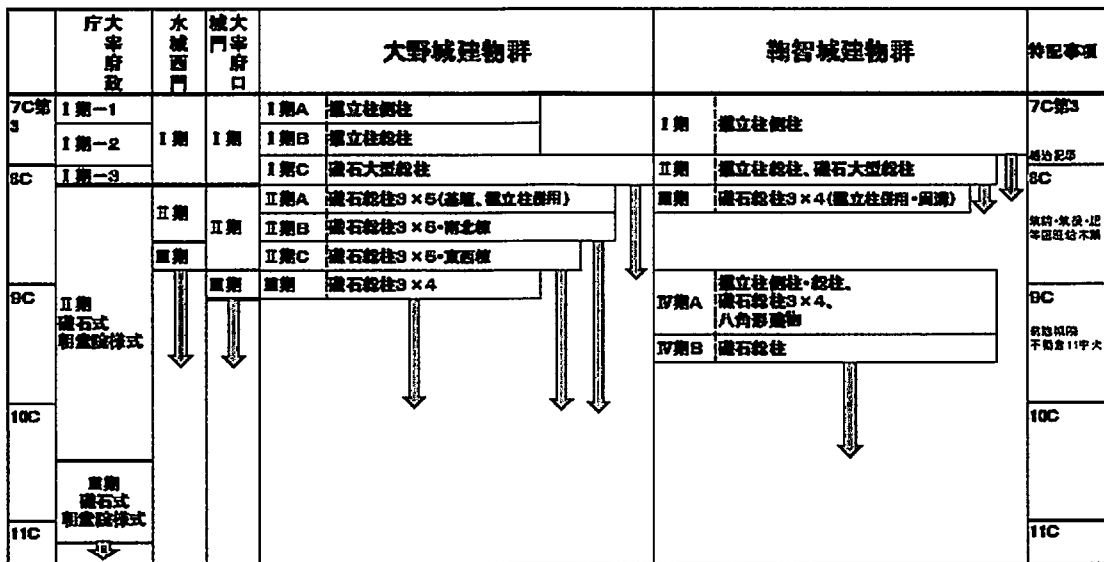
筑紫城の建物の変遷を大きく3つの画期で整理してみた。Ⅰ期は大宰府政庁Ⅰ期である。Ⅱ期は大宰府政庁が礎石式となって大きく生まれ変わった政庁Ⅱ期である。Ⅲ期は政庁Ⅱ期の存続期であるが、平安時代からの大きな動きのあった時期である。

Ⅰ期（665年～8世紀初） 大野城が築城された当初の時期である。大野城の主城原地区と鞠智城の長者原地区に掘立式側柱建物が造営される。大野城ではその後掘立柱式の総

柱建物へと建替えられる。I期の終わりには、大野城・基肆城・鞠智城には礎石式の建物が出現する。礎石式建物の初めての造営で、3×8間以上（おそらく9間か）の長倉である。文武二（698）年の大野城・基肆城・鞠智城の修繕記事が、この礎石式への転換に該当するとみられる。同じ頃、7世紀末になると大宰府政庁域に筑紫大宰府の中樞施設と思われる大型の掘立柱建物が整然と配置される。

時期決定は基肆城の大礎石群（長倉）出土の百済系単弁八葉軒丸瓦と三重弧文軒平瓦が7世紀後半であること。大野城主城原地区出土も高句麗百済系とされる鎬弁の単弁八葉軒丸瓦は鞠智城出土と同系統であり、同時期とみられる。瓦は掘立柱形式の建物にも用いた可能性があるが、礎石式建物に葺かれていたと考える。

II期（8世紀初頭～8世紀末） 大宰府政庁II期の殿舎が完成した時期から、794年の平安遷都の頃の時期までである。大野城と基肆城では全ての規模とプランさらには柱間寸法まで規格が統一された3×5間の礎石倉庫が随所に建てられる。主城原地区では、礎石式の長倉をこの形式の建物に建て替えており、大きな画期となっている。大野城では、まず基壇を有する建物や掘立柱を巡らせた礎石・掘立柱併用建物が造営される。しかも全て南北棟である。次に基壇や周囲に掘立柱を備えない南北棟で構成される。その後順次拡張され南北棟の用地確保が難しくなったためか、東西棟が造営された時期である。鞠智城では、この時期に3×5間の規模の礎石式倉庫はないが、3×4間のうち、礎石掘立柱併用建物や周溝を巡らした大野城と同じ格の高い礎石式倉庫がこのころ築造されたと考えられる。



第2図 大宰府政庁・水城・大野城太宰府口城門・大野城建物群・鞠智城建物群変遷図

時期決定は大野城や基肆城では鴻臚館式やその系統の軒瓦・軒平瓦、老司II式軒丸瓦などが随所から出土している。これらはII期政庁の造営のために使用された瓦である。II期政庁とほぼ同時期もしくは少し遅れた年代の造営が考えられる。

Ⅲ期（9世紀～10世紀代） 大野城で3×4間の礎石式総柱建物が造営された時期である。基肆城では現在のところ3×4間は確認されていない。鞠智城では8世紀後半は空白期だが、9世紀以降になると、礎石が大型化し3×4間の定型的な規模の倉庫が多数造営されるようになる。9世紀ごろから八角形建物や各種の倉庫が造営される。大野城と同じ動向にあり、不動穀蓄積の停滞期から増加期に転じたとも考えられる。

年代の根拠は大野城では9世紀前半までの土器や、平安期の瓦が主城原地区を中心に出土する。鞠智城では比較的まとまって9世紀から10世紀後半ごろまでの土器が出土している。

このように筑紫城として全体を俯瞰すると、変遷と存続時期が細かい点まで全て合致するわけではないが、7世紀末から8世紀前半の長倉形式の礎石総柱建物の出現と続く礎石式倉庫群の造営、さらには9世紀の礎石倉庫群の拡張は同じ歩調と理解できる。

#### おわりに —筑紫城の倉庫群の意義—

古代の史料では一口に倉庫といっても、その呼称は内容によって異なっていた。稲・穀・粟などを収納する「倉」、兵器・文書・書籍・布帛・宝物を納める「庫」、そして、クラの総称あるいは中央政府の貯蓄施設の意味で用いる「蔵」の使い分けがある。これら山城の倉庫は、重量に耐えうる総柱高床構造で桁も長い。桁の長い倉は壁材に角材を使った板倉と考えられ、一般的には稲穀等を収納する倉と考えられている。大野城では、これまでに尾花地区で倉に接した位置で炭化米がまとまって出土している。詳細な調査によるものではないが、かなりの量が廃棄埋没している。鞠智城に関する史料には『日本文徳天皇実録』天安二（858）年に不動倉11棟の火災記事がよく知られている。このように、これらの倉庫の多くは稲穀を不動穀として貯積されていたとみられる。

ところで、全国の諸国郡に設置された倉を正倉と呼ぶ。各国の場合は国司が管理して原則として郡衙に付属して設置されるものである。これら山城の倉庫群も配置や規模からみると、永年蓄積を目的に郡衙正倉と同じ管理方式に則って倉庫が形成されていることが理解できる。また3つの山城には長倉が造営されていた。郡衙正倉には法倉と呼ばれる超大型もしくは高質の倉庫が設置されている。古代山城の長倉も法倉と類似した規模で、倉庫群の中心的な位置にあるのは違いなく、この点でも山城の倉庫群が律令制の財政基盤となる正倉のあり方を本質的にそのまま適用していることが指摘できる。しかも規模が大きいため、大郡クラスの郡倉に対比でき、諸国郡の稲穀収納の場所へと性格が変化したのではないかと考えている。この指摘は日本の古代山城の性格を考える上で重要である。

さて、Ⅱ期の大野城と基肆城では3×5間の規則的な規模の倉庫が造営されているが、その棟数は、大野城で確実な例で32棟、不明なものを加えると35棟となる。基肆城では確実なものが23棟を数える。不確実な倉庫建物が12棟である。これまでに3×4間は確認されていないので、この規模が不明なものも桁行5間の可能性があり、これを加えると35棟となる。両城とも同時期にほぼ同数の倉庫が造営されているのである。つまり同量の

稲穀が貯積されていたことになる。立地条件の違いを超えてほぼ同数の倉庫が維持されていたことになり、仮定すれば稲穀の蓄積量が事前に定められていて、計画的な倉庫の造営と管理・運営がなされていたことを示している。

なぜ平地ではなく山城に膨大な稲穀を蓄積しておく必要があったのか。まずは唐・新羅の侵攻に備え、山城の兵糧を蓄積することが重要だと思われる。次に天平年間の大宰府政庁前面の溝からは、基肆城に蓄えている稲穀を九州北部の各国へ分け与えるよう記した木簡が出土している。天変地異などの非常事態に備えて稲穀（粃米）を蓄えていたことも大きな理由である。

西海道は、他地域と異なり中央にとって歴史的に警戒すべき地域でもあった。地域の豪族層によって成立している郡衙正倉に頼ることなく、大宰府の管轄下で独自の財源を確保しておくために大野城・基肆城・鞠智城の内部に不動倉とでもいうべき稲倉を形成したと思われる。そこには、大宝初年より拡充された倉庫制度が国司を通じて国家管理を進めようとした姿が重なってくる。大野城・基肆城そして鞠智城の大型で礎石化した倉庫群が、8世紀前半に整備された意図が見えてくる。つまり、古代山城に膨大に蓄積された稲穀は、非常事態への備えであるだけでなく、地域支配に不可欠な不動穀としての性格を備えていたということになる。8世紀前半になると太宰府口城門は防御機能よりも荘厳化や威厳を保つ方向に転換されるなど大きな方針の変更があったことを物語っている。

また、9世紀になって大野城と鞠智城で倉庫群の大規模な拡張がなされる。各種の史料からは8世紀末ごろから新羅への脅威や外国人がもたらす疫病（感染症）に対する対外的な不安がうかがえ、こうした背景の中で古代山城は物心両面での支えとなる存在としてクローズアップされたと考えられる。山城の立地は稲穀等を長年にわたって保存するうえで平地より適していたということである。争乱や盗難・破損などの人的な要因、地震や台風、水害・火災などの災害要因、温湿度や紫外線などによる劣化要因、虫やカビなどによる生物要因など、さまざまな影響要因について考慮した結果だと考えられる。

最も恐れるのが略奪や盗難である。ひとたび乱が起きると、場合によっては灰塵に帰することも想定される。当然ながら山城は要害堅固である。しかも、昼夜を問わず警備がなされていた。つまり収納物を護るのにこれ以上の場所はないであろう。この強固な警備が山城に倉庫を造営した最も大きな要因といえるかもしれない。このように朝鮮式山城は兵站から備蓄へと主要な機能が変わったのである。



### 【講演③】

#### 神籠石系山城の捉え方－築城年代・築城主体論の克服

向井 一雄（古代山城研究会代表）

はじめに

神籠石系山城の研究はこの数年落ち着きを見せている。学界では長い論争の末、特に 20～2012 年の鬼ノ城の城内調査によって築城年代の議論がようやく収束を見せ始め、研究者間にコンセンサスが形成されつつある。

筆者は 1991 年に拙稿「西日本の古代山城遺跡」を『古代学研究』誌上に発表して以来、日本の古代山城に関する論考を発表してきたが、築城年代と築城主体についての検討に時間とエネルギーを割いてきた。日本の古代山城に対する関心が「いつ」「だれが」「何のため」に築城したのか、謎の遺跡とされる神籠石系山城の議論に集中していたからだ。

学界での議論がまとまり始めたものの、民間古代史論においては神籠石系山城を在地勢力による築城とする考え方が蔓延している。最近では唐の倭国占領軍が築城したとする陰謀史観的な珍説が再提起されるなど(1)、古代山城研究をめぐって議論がやまない状況が続いている。

本稿では、神籠石系山城の研究史を振り返り、築城年代や築城主体の議論がどのように推移し、現在の研究がどのような段階にあるのか、わかりやすくご紹介したいと思う。

#### 1. 朝鮮式山城と神籠石系山城

##### 古代山城と学術用語

古代山城に対するイメージはどこかモヤモヤとしたものがつきまとっている。年代や築城主体の明かな朝鮮式山城がある一方、神籠石と呼ばれる遺跡は誰が何のために造ったのかわからない“謎の遺跡”といわれている。「神籠石」という不思議な名前も謎の遺跡感をいっそう高める。シンロウセキを「こうごいし」と読むことをどのくらいの人がわかるだろうか？「城」なのに何故「石」なのか？とますます古代山城に対する焦点が定まらなくなってくる。かたや、一般向けの概説書を読むと、朝鮮式山城も神籠石もいっしょの地図に描かれ、神籠石は朝鮮式山城と同じ古代山城の一種だと説明されている。同じ種類の遺跡なのに、朝鮮式山城、神籠石、古代山城……と、どうして様々な名前で呼ばれているのか？混乱は深まっていく。

試みに「神籠石」を辞典で調べてみよう。最新（2018 年）の『広辞苑（第七版）』では、「こうごいし【神籠石】古代の山城の遺跡。北九州と中国・四国に 10 ヶ所ほどが知られる。丘陵上に切石で列石をめぐらし、谷間には水門のある石塁がある。門址のあるものもある。神籠石式山城。」となっている。朝鮮式山城は「ちようせんしきやまじろ【朝鮮式山城】唐や新羅の侵攻に備えて七世紀後半に西日本で築かれた山城。構造が朝鮮半島の城に

似ることからの名。」とある。教科書で定評のある『山川 日本史小辞典(改訂新版)』2016年では「こうごいし【神籠石】大きな切石を隙間なく連ねた列石を根固め石とする土塁と水門・門などからなり、9カ所とも築造方法は基本的には同じ。7世紀代に、大和朝廷によって交通上の要衝や政治的に重要な地点の近くに構築された。」「現在9カ所が確認される(岡山県大廻・小廻山、愛媛県永納山の類似遺構は含めない。)」と少し詳しい説明となり、朝鮮式山城については「ちょうせんしきさんじょう【朝鮮式山城】天智朝以後、朝鮮の山城築造技術の影響をうけて、西日本各地に造られた山城をさす。(中略)築造には、朝鮮半島からの渡来人が参画していたが、山城の立地、縄張り、城壁の構築法、水門の構造、城門施設などは各山城の間で一様ではない。」「その多くは文献の記載と一致するが、城山遺跡(香川県)のように文献に記載されていないものもある。」となっている。

引用が少し長くなったが、いずれも簡にして要を得た説明といえる。ただしこの短い説明文の中にも、古代山城論の混乱が見え隠れしている。2003年刊行の『日本考古学事典』ではどうだろう。神籠石は「朝鮮式山城の多くが『日本書紀』に記事のある城をさすのに対して、その種の記録のないものを一括して呼ぶ。(中略)霊域をさす名称を避けて神籠石式(系)山城と呼ぶ人もいる。」とし、列石をめぐらすことではなく、記録のあるなしが分類呼称として登場する。2008年の『歴史考古学大辞典』では「こうごいし【神籠石】西日本、特に瀬戸内・北部九州に分布する古代山城。(中略)近年は、神籠石の呼称をなくして古代山城跡として一括整理する研究者が多い。」とあり、『広辞苑』や『山川 日本史小辞典』よりも最近の研究成果に基づいた記述が増えている。

### 神籠石の呼称

「神籠石」というと福岡県久留米市の高良山を廻る列石のこととされているが、実は1898年(明治31)、高良山の列石遺構が小林庄次郎によって学会誌へ報告された際に「列石の呼称は神籠石」と誤って紹介されたことによる。高良大社の宮司を務め地域史研究家でもある古賀寿の研究によると、列石遺構はかつて「八葉の石畳」と呼ばれていたこと、現在高良大社の参道脇にある「馬蹄石」という巨大な岩盤が「本来の神籠石」だったことがわかる。

高良大社の最古の文書である『高良記』によれば、高良山にはもともと地主神である高牟礼神がいたが、高良大菩薩(高良玉垂命)が結界(=列石)を張って高牟礼神を騙して追い出したという。この大菩薩の神馬の爪跡が馬蹄石に残る窪みだとされている。馬蹄石と参道を横切る列石線はすぐ近くにあるため、江戸時代には既に両者は混同されはじめていて、明治の学界への報告でも誤認したというのが真相らしい。



図1 高良山の馬蹄石



それでは「神籠石」が「古代山城」の遺跡呼称としてどうして定着してしまったのか？その経緯について神籠石論争の推移に沿って確認してみよう。勃興期の日本考古学界において、法隆寺再建論争と並ぶ二大論争といわれる神籠石論争は、八木柴三郎、関野貞、谷井濟一の山城説に対して、喜田貞吉が靈域説を唱えることで14年に及ぶ論争となった。論争はおおよそ明治、大正の二時期に分けられるのだが、こと遺跡の名称として喜田は「神籠石」の使用を繰り返した。これに対して関野や谷井は「神籠石の名称は改めねばならぬ」「普通名辞として…冠するは絶対に避けざるべからず(避けなければならない)」と主張し、関野はその著書の中でも「高良山山城」などと表記し、神籠石という言葉は一切使っていない。

確かに神籠石という名称は高良山だけで見られるもので、各地で発見された他の同種の遺跡には神籠石の名称はなかった—例えば雷山は「筒城」、鹿毛馬は「牧の石」、御所ヶ谷は「景向天皇行宮」、石城山は「山姥の穴」など様々な呼称が付けられていた。後年、古賀によって高良山の列石も元は神籠石と呼ばれていなかったことが明らかにされたが、時既に遅く古代山城の遺跡呼称として「神籠石」が定着していた。喜田がこれらの遺跡に対して「神籠石」と呼ぶことを止めなかった理由は、自説である靈域説に有利な名称であったからに他ならない。「神の籠もる石」—いかにも靈域、神域を画する列石として神々しく、少し変わった読み方も不思議なインパクトを与えたのだろう。

#### 柳田國男の神籠石批判

喜田は、高良山の列石遺構の報告の後、次々と各地で発見された同種の遺跡をまとめて、1910年(明治43)に『歴史地理』15-3で「神籠石號」を出して、靈域説こそ真説であると主張した。ところが同年『石神問答』で柳田國男から強力な反論を受けることになる。柳田は「(神籠石は)孤立せる奇石の名なり」と喜田の磐境説を支持するどころか、神籠石を列石遺構の名称として使用することに疑義を唱えた。これを受けて喜田は『歴史地理』16-3の「神籠石と磐境」と題する論文中で、「(神籠石の名称を)眞の意味に於ける「神靈の鎮座せる巨岩」に附するを至當とす」と一旦は柳田の磐座説を認めている。しかし一度学界に流布した呼称は一般名称化し、喜田はその後も神籠石を列石遺構の名称として使用することを止めようとはしなかった。

柳田は、神籠石が皮籠石、革籠石、交合石、皇后石、川子石など様々な当て字で表記され、全国的な分布状況を持つ点も指摘しているが、現在まで筆者が収集した神籠石類似の神体石や地名は全国で140例以上、北は宮城県から南は鹿児島県まで広がっている。神籠石は、革籠石、香合石など石材の形態に由来するものや交合石のように夫婦岩信仰が加わったもの、また北部九州に多い神功皇后伝承と関連付けられた皇后石など、いずれも本来の意味から離れて別の由来や伝承が付会したものも多い。文献的には高良大社や忌宮神社(下関市)に伝わる文書・絵図から鎌倉時代頃まで遡れるが『記紀』などにはみえず、古代まで遡る呼称ではない。式内社クラスの古社に多く、磐座などの岩石祭祀と関係のある

言葉であること以外、詳細はわからない。柳田も「カウゴ（こうご）」の字義については意味不明としている。

### 神籠石論争の帰着点

「神籠石號」の3年後の1913年（大正2）、『考古学雑誌』4-2で山城特集号が生まれ論争の趨勢としては山城説に傾いたかに見えた。論争の第二ラウンドは関野や谷井といった朝鮮半島の山城を熟知した研究者が参加し、関野は列石を木柵の根止め石とし、谷井は列石上に土壁（土塁）の存在を想定した。その後の調査の知見に照らせば谷井の「土壁の基石」説が正鵠を射ていたわけだが、切石列石の不経済的、虚飾的な部分が、城郭研究者である大類伸をして列石遺構を城郭と断ずるのを躊躇させたようだ。大類は『考古学雑誌』4-7の「『神護（ママ）石』問題解決尚早論」で列石上の土柵論に疑問を呈し、「山城々壘と「神護（ママ）石」列石との間には、尚研究の餘地を存する」としている。

列石上の土塁の存在を立証せよという問いに対し、発掘調査を伴わない調査段階であったため、戦前の考古学者たちは答えることができなかった。今では山城説と靈域説は互いに相容れない対立する学説のように理解されているが、大類は「（神籠石は）朝鮮山城の思想を学びしもの」と述べ、列石が山地を廻る圍繞形態—遺跡の平面プランが朝鮮式山城に類似している点は大類、喜田兩人共に認めており(2)、論争の最終段階では遺跡の立面構造の解明が焦点となっていた。

### 朝鮮式山城という学術用語

「朝鮮式山城」という用語は、関野が最初に用いており、朝鮮半島様式の城郭という意味で大野城などに対して「朝鮮式直写の山城」と表現している。学術用語としては、戦後、鏡山猛が論文・著書などで用いて定着した。「朝鮮式」の意味について、大野城などの築城を百濟からの亡命貴族が指導したことによるという解釈を時に見かけるが研究史的には誤解である。ちなみに「古代山城」という用語は、神籠石論争時に谷井が「日本上世山城」という表現を最初に使っている。1960年代頃まで古代の山城を表す用語は「朝鮮式山城」しかなく、北部九州を中心に分布する高良山などの神籠石遺跡は単に「神籠石」と呼ばれていた。朝鮮式山城と神籠石を総称した名称としては当初「古代城柵」が用いられていたが、斎藤忠が「古代山城」を提唱し、葛原克人や出宮徳尚が神籠石と朝鮮式山城を「古代山城」と総称した論文を発表、徐々に使用する研究者が増え学術用語となった。

朝鮮式山城を「ちょうせんしきやまじろ」と訓む研究者もいるが、朝鮮の山城＝さんじょうから造られた造語であり、鏡山も「ちょうせんしきさんじょう」としている。古代山城も同様に「こだいさんじょう」と訓むのが正しい。史跡名称として、唐原山城跡以降、古代の山城を「さんじょう」、中世以降の山城を「やまじろ」と名付けようというルールもあるようだが、学術用語としては上記のような経緯があることをご理解いただきたい。

## 神籠石呼称の存続の是非

「神籠石」が古代山城を表わす名称として不適当な呼称であることは明らかなのだが、学界では慣習としてこの名称を使い続けている。神籠石論争の遺産として愛着のある名称であり、捨てがたいというのは学問的とはいえない。

1971年の鬼ノ城、73年の大廻小廻山城の再発見、そして77年には永納山城が発見されるに及んで、瀬戸内での古代山城の存在が注目される中、斎藤忠は、神籠石を「神籠石式山城」のような形で学史的な名称として継承しようとしたのに対し、坂詰秀一は、まず西日本の古代山城を一括して把握し、外郭構築技術と内部機能の検討によって新たな遺跡呼称を検討する必要性を説いた。兩人共に神籠石という名称が「その対象について不明瞭」「先入観となって歪められる」「“名”と“実”とが一致していない」と述べていること、そして「文献にないことをもって必要以上に穿鑿し、想察すべきではない」としていることは注意すべき点である。70年代末の瀬戸内での古代山城遺跡の発見は研究史の上で大きな転機になるはずだったが、80年代以降の研究者は「神籠石」という分類名称を使用し続け、かえって分類を固定化してしまい、文献に記録があるか、ないかといった「文献の記載状況」に研究の主眼を置かれることになっていった。

現在、古代の山城については、記録の残る山城は「朝鮮式山城（天智紀山城）」、記録のない山城は「神籠石系山城」と呼ばれているが、文献に記録のあるなしによる分類は考古学的分類としては実態にそぐわない。近年の調査成果によると、神籠石系山城もいくつかの類型に分けられるし、朝鮮式山城自体多様である。遺跡の多様なあり方を先入観なしに見定める上にもまず「古代山城」として一括して捉えるべきであろう。

## 2. 研究の推移

### 地方勢力築城説の源流

戦前の神籠石論争以来、1960年代の発掘調査までは、神籠石系山城（特に北部九州の山城）はその分布から邪馬台国や磐井といった九州の在地勢力に関係するもの、年代も文献史料になく伝承も残されていないことから、かなり古い時代に造られ忘却された遺跡とする考えが支配的だった。史書にみえない山城を在地勢力に関わるものと捉える考え方は決して目新しいものではない。古くは矢野一貞が高良山の八葉石塁（神籠石）を磐井が築いた山城と『筑後国郡志』などに書き残している。神籠石論争に先立つこと十年前に、久米邦武が高良山や雷山の遺跡に注目し「筑紫君の邪馬臺は此地方に在べし」と指摘している。橋本増吉は女山や高良山を現地調査して、「邪馬臺国に統属していた倭人諸国が…韓人諸国の山城制を移入するに至るべきことは、寧ろ当然」で「同一型式の遺址が、当時の倭人諸国の根拠地と認められる各地に、現に残存している」と結論している。

### 80年代の古代山城ブーム

古代山城ブームの時代ともいわれる1980年代は従来の枠にとらわれない研究が次々と



図2 鬼ノ城西門と版築土塁

発表されたが、かたや学説が乱立し混乱した時代でもあった。西川宏は、瀬戸内地域でも確認されはじめた古代山城を広く渡来系の遺跡と捉えて注意を喚起し、また地方勢力の築城から律令国家の修築まで長期間にわたる段階的な使用を想定した。西川は「古代貴族は…（神籠石を）記録の上から消そうとしたのである」と述べ、この頃の古代山城研究の思想的動機が奈辺にあったかが窺える。このような「古代山城再評価」は当時、上田正昭や金達寿

らの進める「渡来文化見直し論」と軌を一にするもので、李進熙の「渡来系氏族築城説」はその最も先鋭化した説といえる。西川や李の従来説との違いはその段階的使用を想定しているところで、朝鮮半島の山城が時代を越えて継続使用されているという知識によっている。

松本清張も神籠石について論じており、「神籠石は「国家」の命令によって、構築されたものではなく…地方豪族によって造られたもの」で、防塞的機能が貧弱であることから「神籠石を「山城」と考えることはできない」とし「神籠石の宗教性」から住民の「集会・祭祀・避難場所」だったとしている。江上波夫も騎馬民族説の考古学的証拠として「神護（ママ）石についての再検討」を主張している。森浩一は古代山城周辺の古墳群と山城の築城主体を同一視する説を繰り返し述べており、文献に記録のない山城を在地勢力の逃げ込み城とする見方が一般の方々に流布し、民間古代史論における古代山城像のベースになっていることは間違いない。このように地域勢力築城説が現在でもなお命脈を保っている理由は、森一人の責任ではない。地方豪族築城説は石野博信など専門研究者の間でも神籠石系の山城に対する一つの城郭観となっている。石野は「地域の豪族によって築造された神籠石は文献に記録されず、大和政権が築造した公城は文献に登場する」とされる。最近の調査によって築城年代や縄張り、工法の規格性・共通性などが判明してきたため、築城工事の発動（命令）は畿内政権とし、工事の実務については民間（地方豪族）が担当したと考える一種の折衷説も考古学者の間では根強い。

地域勢力築城説が根強い人気を誇るのは、80年代頃から盛んに提唱され始めた「地域王国論」や「地域国家論」の影響も大きい。古代山城がそういった強大な地方勢力の象徴もしくは過去に実在した証拠として説明し易い遺跡であるため、築城年代が新しいと判明しても、現在地表に残る遺跡の下層に古く遡る遺構が眠っているのではないかと想像し「空想の複合遺跡」を想定する説が跡を絶たない。さすがに最近では神籠石と邪馬台国を結びつける説は見かけなくなってきたが、これらの諸説に共通するパターンとして、神籠石の所在地には7世紀以前（古くは3世紀）から何らかの施設（聖地・宮殿・山城）があり、列石はその遺構で、山城として改築・利用されたのは白村江敗戦後と考えている。しかし現

在までの調査で長期間にわたる継続使用や改築の痕跡は確認されておらず、古墳時代後期に築城後、律令国家が再利用したというストーリーは根拠のない想像に過ぎない。

### 考古学史上の編年論争

「文献に記録のない山城が在地勢力の逃げ込み城である」というイメージは今でも古代山城研究にまわりついている。「神籠石系が古く、朝鮮式は新しい」という年代観も固定されたイメージとなっている。これでは古代山城の研究が始まった明治末年の段階と何も変わっていない。古代山城は近年の発掘調査や研究の進展によって、ようやくその真の姿をあらわしつつある。しかし一部の書籍などには戦前からの旧説が今だに生き残っており、学界での研究成果が古代史ファンをはじめとする一般の方々へ正確に伝えられていない。

考古学上の年代や編年観が覆った事例は意外と多い。研究や資料が少ない段階ではよくある話ともいえる。例えば、古墳の埋葬施設である「竪穴式石室」と「横穴式石室」について、かつて喜田貞吉が「前期の古墳には竪穴式石槨（＝石室）があり…後期の古墳はもっぱら横穴式石槨である」と論じたのに対して、高橋健自は「横穴式石槨はずっと古い時代から行われたもので」「竪穴式石槨の方は、横穴式石槨に比べると寧ろ後に起つて…横穴式石槨の方が竪穴式石槨よりも古い」と反論している。高橋の論旨は、イザナギの黄泉国訪問譚の光景が横穴式石室に相当するというもので、喜田は後期の横穴式石室について「韓土との交通より、高句麗の葬法を輸入せるもの」と大正段階の研究としては優れた見解を示している。

日本における近代的な考古学研究は1877年（明治10）のモースによる大森貝塚の発掘から始まった。その7年後、東京市本郷区向ヶ岡弥生町で弥生土器が発見されたが、その所属年代については、多くの意見が提出されて長く議論が続いた。名称についても、弥生式土器、中間土器、有紋素焼土器、埴瓮土器など様々な意見があった。中間土器は、古墳出土の土器（土師器）と石器時代の土器（縄文土器）との中間に位置するという意味であり、埴瓮土器は土器の製作材料から古墳出土土器（土師器）も含めた名称である。1900年代の初頭では、縄文土器と弥生土器の差を、それを使用した民族の違いと見ようとする意見が多く、中間土器を提唱した八木柴三郎は弥生土器の使用者を「国栖土蜘蛛種族等の遺物であり」「マレイ族の一派」としている。縄文土器と弥生土器との年代的関係は1917-18年（大正6-7）の国府遺跡（大阪府）の発掘調査によって、層位的に立証された。

横穴式石室の年代根拠にイザナギの黄泉国訪問譚を用いたり、縄文土器と弥生土器の差を民族の違いと見る研究は、日本考古学草創期の古典的な段階の研究とはいえ、ある意味示唆に富んでいる。安易な文献史料との対比が研究の停滞を招いた事例は「倭国大乱と弥生中期の高地性集落」や「仁徳・応神天皇陵と中期古墳の編年」など、その後も時折見られ、考古学者が陥りやすい傾向である。型式学的な研究方法は現在では常識となっているが、古代山城研究においては朝鮮式と神籠石系を対立的に捉える考えが強く、この点は19世紀的との誹りも免れない。考古学研究はまず考古資料の検討からという王道に今こそ立

ち返ることが求められている。

### 齊明朝築城説

1988年に渡辺正気の「齊明天皇西下時築城説」が発表されると、九州の研究者や調査担当者はこぞってこの説を引用、支持するようになった。神籠石遺跡から土器などの出土が少ない点が年代を推定する上で最大のネックとなっており、考古学研究者らを悩ませていたが、齊明四年是歳条分注「或本」は長年の問題を解決する福音となった感すらある。渡辺説は九州の神籠石遺跡に限定したものだだったが、その後、他の研究者らによって瀬戸内の古代山城も齊明朝に造られたと拡大解釈されるようになる。

80年代の古代山城研究は、瀬戸内の山城発見を契機に古代山城遺跡を再評価するところから始まった。しかし発掘が充分行われていない段階であったため、築城年代を絞り込むことができず、文献記載＝朝鮮式、文献未記載＝神籠石系という分類に固定化されたことが山城遺跡の多様性を見る視点を失わせ、最終的に齊明四年是歳条という文献史料に築城年代や契機を仮託するに至った。80年代の研究によって、70年代までに一定のコンセンサスが得られつつあった年代論・築城主体論が再び振り出しに戻されてしまった感が強い。本来の神籠石の名称にはなかった「文献に記録のない山城」という定義が広まり、讃岐城山城や鬼ノ城といった山城も城山神籠石、鬼城山神籠石と呼ばれ始めたのもこの時期で、神籠石という分類呼称が考古学的意味を失っていった。

90年代に入ると史跡整備のために各地の古代山城で継続的な調査が開始された。瀬戸内では1985～89年の大廻小廻山城の後、94年から鬼ノ城の調査が総社市によって行われ大きな成果を上げることになる。また熊本県では1994年から鞠智城の史跡公園計画が始動し、93年からは金田城や御所ヶ谷城、94年に鹿毛馬城の調査が始まるなど九州でも山城調査の機運が高まっていく。1987年の播磨城山城の発見や98年の屋嶋城での南嶺石塁の発見、そして1999年の阿志岐山城、唐原山城の発見など90年代は新しい遺跡・遺構の発見も続いた。このような新しい研究状況の下で、古代山城論にも新しい動きがみられるようになった。それは、1988～92年にかけて、山上弘や乗岡実、筆者などから、相次いで後出説が発表されたことである。神籠石系山城の年代を朝鮮式山城より新しくみる後出説自体は既に70～80年代に小野忠熙、田村晃一などによって提唱されていたが、新しい後出説の特徴は遺跡の占地や縄張りや城壁構造から類型化を行い、その上で山城遺跡の編年を検討しようというところにある。しかし学界の趨勢としては齊明朝築城説を前提とした論説が数多く発表され、後出説は異端視され今暫く受け入れられない時代が続いた。



図3 阿志岐山城の列石

## 2010年代の研究

従来の考え方に見直しを迫ったのは鬼ノ城の発掘調査の進展だった。総社市による外郭線の調査によって鬼ノ城の外郭線や城門などの構造面が明らかにされると共に、1999年の岡山県による城内試掘調査、2006年からの本格調査によって鬼ノ城の年代を示す土器が多量に出土した。鬼ノ城が古代山城として朝鮮式山城と比べて遜色ない構造を持つこととその築城・維持された年代が7世紀第4四半期を中心としていることは、文献未記載の山城を斉明天皇四年是歳条を頼りに説明してきた先行説の研究者も無視できず、再考を迫ることになった。御所ヶ谷城や永納山城など文献に記録のない山城からも7世紀後半の土器が出土することに対して、神籠石系諸城の未完成・放棄、白村江戦後の一部修築・朝鮮式山城との並存といった一種の解釈論・折衷案が出された。

2008年に発表された八木充の論文は、斉明朝築城説の再考を促す文献史学からの警鐘となった。八木論文の要旨は、斉明四年是歳条の「国家」が倭国ではなく百済であり、この記事の「兵士甲卒、陣西北畔」「繕修城柵」が百済滅亡後の復興軍の活動を示しているということで、新解釈によれば斉明朝築城説はその論拠を根底から失いかねない。翌年開催された「神籠石サミット久留米大会」では八木論文の影響からか、斉明天皇一色だった論調がトーンダウンし、これ以降、考古学者が斉明朝築城説を表立って主張することはなくなった。

八木説への反論は渡辺からは出されなかったが、2016年、堀江潔が反論を発表した。堀江は斉明四年是歳条の「由是」以下の文は倭国を主語として読むべきで、倭国の西と北の国境地域（九州・北陸地方）で兵士配置と防塁・木柵などを備えた何らかの施設の修繕が行われたことが読み取れるという。北部九州各地では神籠石・山城の築造・修築など防衛体制整備が進められたというが、考古学的根拠はほとんど提示されていない。そもそもこの斉明四年是歳条の記事は、658年（斉明4）の出雲における雀魚大量漂着から始まる予兆記事であり、『日本書紀』編者は、不吉な雀魚の話から二年後の海の向こうの百済滅亡を予言し、百済救援軍の派遣とその後の防衛体制の話がこの記事に語らせたかっただけかもしれない。斉明四年是歳条の解釈に頼って考古学的検討を怠り、八木論文で簡単に転向した考古学者らも無責任だが、不確かな文献史料では神籠石系山城の築城年代を決めることはできない。この記事を重視するならば、583年の日羅の塁塞や689年の筑紫の新城(3)、699年の三野・稻積城も取り上げねば、恣意的だと誹りを受けても仕方がない。斉明四年是歳条に「繕修」とあることからそれ以前に城があった証拠だと解釈する考古学者も多いが、考古学者が年代を決めるのに、文献史料だけに頼るようになってはもはや考古学者ではない。

2010年3月の条里制・古代都市研究会「山城と都市・交通」では、筆者らによって、古代山城の発掘調査の最新成果や駅路、国郡境などと密接に関係した「地域編成」と関わる遺跡であると報告が行われ、歴史地理学・文献史学研究者に古代山城の研究が様変わりし

ていることを印象付けた。2012年、稲田孝司は、山城築城の年代的な範囲が天智・天武朝を中心とした7世紀後半期にあるとし、山城が系統差を超えて3段階で変遷することを論じた。同年10月の日本考古学協会の福岡大会では文化会シンポジウムで小澤佳憲が、九州の考古学者の中では赤司善彦に続いて神籠石系山城の後出説支持を打ち出した。

古代山城は文献記録が少ないこともあって、文献史学の研究者による研究は活発とはいえず、文献史学では、日本の古代山城は全て白村江戦後に同時に造られた防衛施設と捉えるような論調が多い。そういう中で、鈴木靖民は2010年9月開催の「鬼ノ城フォーラム」で、古代山城について「大宰・総領との対応関係…が考えられ」「山城群は、(徴兵・武器集中、民衆把握の)施策との密接な関連のもとに…おおむね670～680年以降の時期に…造営された」とする考えを発表した。仁藤敦史も同年「朝鮮式山城造営と連動して「筑紫」「周防」「伊予」「吉備」という広域行政ブロックが機能していたことは明か」と述べている。2015年には狩野久が7世紀後半に大宰・総領が置かれた地域に集中して古代山城が築かれ、庚午年籍作成の契機を山城築城による徭丁・軍丁調達と関連付ける論考を発表している。山城築城が単に防衛網を造っただけではなく、武器の集中管理と戸籍による民衆把握によって「軍国体制」を立ち上げることと連動した事業だったとする点は今後特に重要な観点になっていくだろう。

2017年、井上和人は古代山城の軍略に関する論文を発表、南健太郎も同年開催の九博と熊本県の合同シンポジウムで瀬戸内の古代山城の築城年代について発表している。いずれも基本的に築城年代は後出説を取るが、井上は同時築城を主張し、南は筆者や乗岡、稲田の編年観とは異なる案を提起するなど、後出説の中でも編年指標の捉え方で微妙な違いを見せている。2018年3月には近江俊秀が鞠智城跡「特別研究」成果報告会で講演して、古代山城の築城を7世紀後半の三段階に分け、駅路との関係で整理を試みている。

2015～16年、木村龍生や亀田修一は古代山城からの出土遺物の整理を行っている。木村は、朝鮮式山城は白村江直後に築城され、神籠石系山城はやや遅れて築城された傾向が認められ、神籠石系山城には白村江直後か若干下がった時期に築城されたものと7世紀第4四半期～8世紀第1四半期に築城されたものがあるとする。亀田は7世紀中葉～後半と7世紀末～8世紀初め頃の遺物が多く、遺物の多いグループ(朝鮮式と一部の神籠石系)と遺物の極めて少ないグループ(神籠石系)に分けられそうだとしている。

### 3. おわりにー古代山城研究法

古代の日本列島には「城」がない時代が長く続いた。そのため研究者一特に考古学者たちにとって城はあまり馴染みのない研究対象であるのも事実である。隣国韓国の研究者らは三国時代といういわば戦国時代が研究対象であり、城の研究は避けて通れないのとは対照的といえる。日本の考古学・古代史の研究者にとって城は苦手な研究対象といえるかもしれない。

山城遺構を検討する上で「占地・縄張りプラン」と「城壁構造」は車の両輪のようなも



のである。80年代の研究は占地分類が主流だったが、最近では城壁構造の研究が目立つ。軍事施設である古代山城を評価するためには、両面からの検討こそ重要である。さらに山地の高低や城壁単体の比較に止まらず、中世城郭における縄張り研究と同じような視点を持って遺構を分析する必要がある。当然のことかもしれないが、古代山城に取り組むには広い意味での城郭や軍事（戦闘・戦争）に関する知識が必須であり、攻城側の導線設定（守城側に有利に設定されている）や横矢掛け（守城側が二方向以上から攻撃できるように工夫されている）など、城としての遺構の機能や目的を読み取る方法や知識を最低限身に付けなければならない。日本における中・近世城郭の研究は長い研究実績を持ち、城の研究として中近世城郭の研究に学ぶべきところは多い。

日本の古代山城の築城年代を7世紀後半と考える筆者は、まず「軍事性」を基軸として山城の占地を評価しようとしている。そこに縄張りや城壁構造の編年を組み合わせると軍事性が高い城から低い城へ、列石に関しては原初的なものから装飾的なものへ変化するとみる—この点に関しては研究の進んだ韓国側資料とも照合して編年序列をクロスチェックすることも忘れてはいない。日本列島に古代山城が伝播した時期は、百済・高句麗の滅亡、統一新羅の成立と渤海の建国という激動の時代の中で韓国の城郭が大きく変化した時期でもある。そのダイナミズムを見極める上でも日本の古代山城研究は韓国側から注目されている。戦争という両国間の悲しい歴史から生まれた遺跡であるが、互いの歴史研究、城郭研究に寄与する重要性もまた大きい。

日本では、古代山城を「対外防衛用」「逃げ込み城（避難用）」とするイメージが根強いが、韓国では古代の城郭に関して国防施設というより、朝鮮三国の互いの進出地域での「支配拠点」や侵攻作戦の「軍事基地」として捉える傾向が強い。日本でいう逃げ込み城用途のものは高麗以降の保民用山城が機能的には近いとされている。これは日本の古代山城が白村江の敗戦を契機に造られたと記録にみえることや80年代に韓国の山城が日本に紹介された時、「朝鮮半島の城郭は日本の中世城郭と違って異民族の侵略から一般住民を避難籠城させる「逃げ込み城」である」と強調されたことによるのだろう。韓国の古代山城では小型の山頂式山城が圧倒的多数を占めることもかなり以前から指摘されているが、列石構造が統一新羅以降普及することと同様、日本の古代山城研究では共通認識とはなっていない。

古代山城は旧国単位で一、二箇所といった分布状況であるため、一遺跡だけの検討に陥りがちだが、汎西日本的な分布は国家的レベルの遺跡であることを示し、他の古代山城との比較を行うことで遺跡の評価が可能となる。神籠石系山城に比べて、朝鮮式山城は文献に記録があるため、国防・有事籠城というステレオタイプなイメージのまま調査が進められてきたが、城内の大量の倉庫群の存在など他の古代山城にはない特殊性を持っており、初築当時の構造や律令期の「城」としての性格について再検討が必要となっている。今こそ、古代山城の研究は年代論や築城主体論から次フェーズの研究段階へステップアップしていくことが求められている。

## 註

(1) 中村修也が2015年に『天智朝と東アジア—唐の支配から律令国家へ』(NHKブックス)で発表した唐築城説は1983年に田辺昭三が『よみがえる湖都—大津の宮時代を探る』(NHKブックス)で発表した説の焼き直しだが、田辺の著書への言及はない。1979年、古田武彦は『ここに古代王朝ありき—邪馬一国の考古学』(朝日新聞社)で神籠石=九州王朝築城説を発表している。古田は1998年にも『失われた日本』(原書房)の「神籠石の証明」で79年とほぼ同じ論旨を繰り返し主張しているが、何故か瀬戸内の山城には触れられていない。晩年の古田や九州王朝支持者は、この指摘に慌てて瀬戸内の山城も九州王朝が築いたと主張し始めている。

(2) 1959年「神籠石の諸問題」『考古学研究』6-3で愚城説を発表した原田大六は、85年の『日本歴史大辞典』(河出書房)の神籠石の説明で「朝鮮式山城の形式化した非実戦的城塞と考えられる」と九州の神籠石系山城の核心部分を指摘している。喜田が靈域説に拘ったのもこの点であり、出宮徳尚も2006年「(神籠石系山城)はむしろ威しの造形、地域を軍事的に威圧するための一つの道具として造られて来たのではないかという、非常に観念的評価をしています…実戦的機能面から見ると…非常に施設や設備の欠落して、簡略化した構築状況でも、結構山城として日本列島では通用したと考えています」と述べ、神籠石系山城の非実戦的な性格を指摘している(『大廻小廻山城跡の謎に迫る—吉備最大の古代山城—(国指定記念シンポジウム記録)』岡山市教育委員会)。

(3) 689年(持統3)の「筑紫新城」を北部九州の神籠石系山城に比定する意見を1970年代に筑紫豊や田村晃一が提起しているが、年代を古く考える研究者にとってこの記事は論外で、一顧だにされていない。当時の年代論が各研究者のこの種の遺跡に対する先入観に左右されていた点は否めない。

## 参考文献

赤司善彦 2002 「筑紫の古代山城」『東アジアの古代文化』112号, 大和書房

石野博信 1991 『古代近畿と東西交流』学生社

稲田孝司 2012 「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』34号

井上和人 2017 「日本列島古代山城の軍略と王宮・都城」『日本古代学』9号, 明治大学

江上波夫 1967 『騎馬民族国家—日本古代史へのアプローチ(中公新書)』

近江俊秀 2018 「律令国家の誕生と鞠智城」『鞠智城と古代社会』6号, 熊本県教育委員会

大塚初重・戸沢充則・佐原真編 『日本考古学を学ぶ』(1) 有斐閣

小澤佳憲 2012 「朝鮮式山城と神籠石系山城—古代山城の考古学的検討—」『日本考古学協会 2012年度福岡大会研究発表資料集』

小野忠熙 1986 「日本における朝鮮式山城の考古地理学的考察」『日本考古地理学研究』大明堂

狩野久 2015 「西日本の古代山城が語るもの」『岩波講座日本歴史 月報』21号

亀田修一 2015 「古代山城を考える—遺構と遺物—」『古代山城と城柵調査の現状』(全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第28回研修会) 岡山県古代吉備文化財センター

木村龍生 2016 「土器の様相からみた古代山城」『築城技術と遺物から見た古代山城』(古代山城に関する

研究会) 熊本県教育委員会

古賀寿 1967『高良山神籠石研究史序説－神籠石なる名称の由来と明治以前の研究史－』筑後地区郷土研究会

斎藤忠 1974『日本考古学史 (日本歴史叢書 34)』吉川弘文館 (1995 新装版)

斎藤忠 1976「神籠石雑考」『月刊考古学ジャーナル』117号, ニュー・サイエンス社

佐伯有清 2006『邪馬台国論争 (岩波新書 990)』

坂詰秀一 1976「神籠石の名称」『月刊考古学ジャーナル』117号, ニュー・サイエンス社

鈴木靖民 2011「七世紀後半の日本と東アジアの情勢－山城造営の背景－」『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館

田村晃一 1971「「神籠石」に関する若干の考察」『青山史学』2, 青山学院大学文学部史学研究室

筑紫豊 1972『筑紫文化財散歩』学生社

西川宏 1973「消されていた朝鮮式山城」『日本のなかの朝鮮文化』17号

仁藤敦史 2006『女帝の世紀 (角川選書 391)』

仁藤敦史 2010「七世紀後半の領域編成－評と大宰・総領－」『日本歴史』748号

乗岡実 1992「古代山城」近藤義郎 編『吉備の考古学的研究』下, 山陽新聞社

堀江潔 2016「百濟滅亡後における倭国の防衛体制－斉明紀「繕修城柵」再考－」『日本歴史』818号

松本清張 1971「神籠石は山城か (上) (下)」『藝術新潮』263号, 264号 (『遊古疑考』1973所収)

南健太郎 2017「瀬戸内海沿岸における古代山城の年代論」『徹底追求! 大宰府と古代山城の誕生』(大宰府学研究・古代山城に関する研究会合同シンポジウム) 九州国立博物館・熊本県教育委員会

森浩一 1990「地域王権と古墳」『歴史読本』臨時増刊'90-3, 新人物往来社

向井一雄 1991「西日本の古代山城遺跡－類型化と編年についての試論－」『古代学研究』125号

向井一雄 2004「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡Ⅱ (遺物・遺跡編)』奈良文化財研究所

向井一雄 2010「特輯『日本古代山城の調査成果と研究展望』に寄せて」『古代文化』61-4

向井一雄 2016『よみがえる古代山城－国際戦争と防衛ライン (歴史文化ライブラリー440)』吉川弘文館

村上幸雄・乗岡実 1999『鬼ノ城と大廻り小廻り (吉備考古学ライブラリー2)』吉備人出版

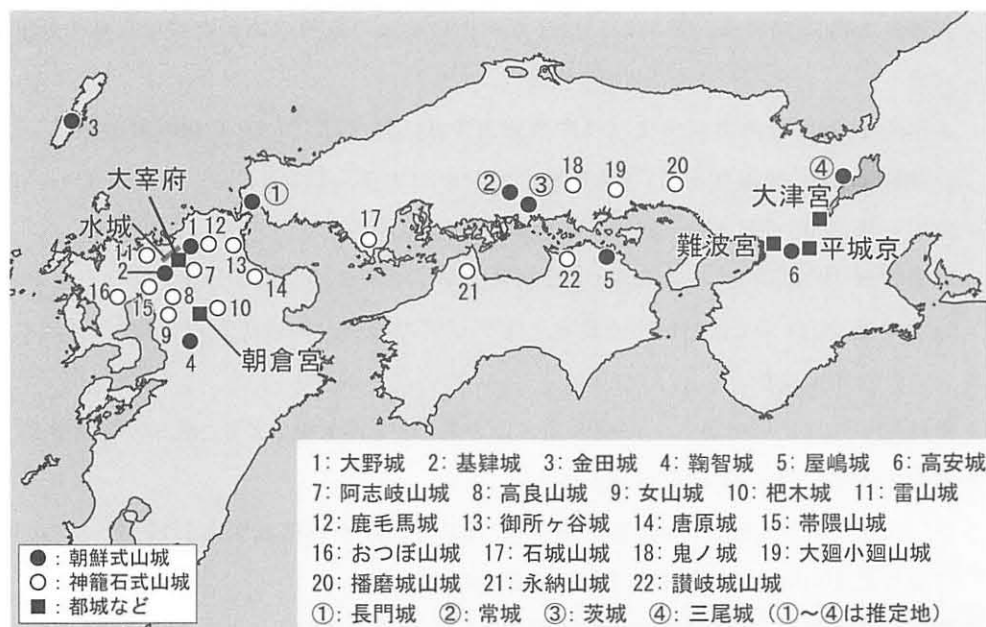
八木充 2008「百濟滅亡前後の戦乱と古代山城」『日本歴史』722号

柳田國男 1910『石神問答』聚精堂 (『柳田國男全集 15 (ちくま文庫)』東京、筑摩書店 1990年所収)

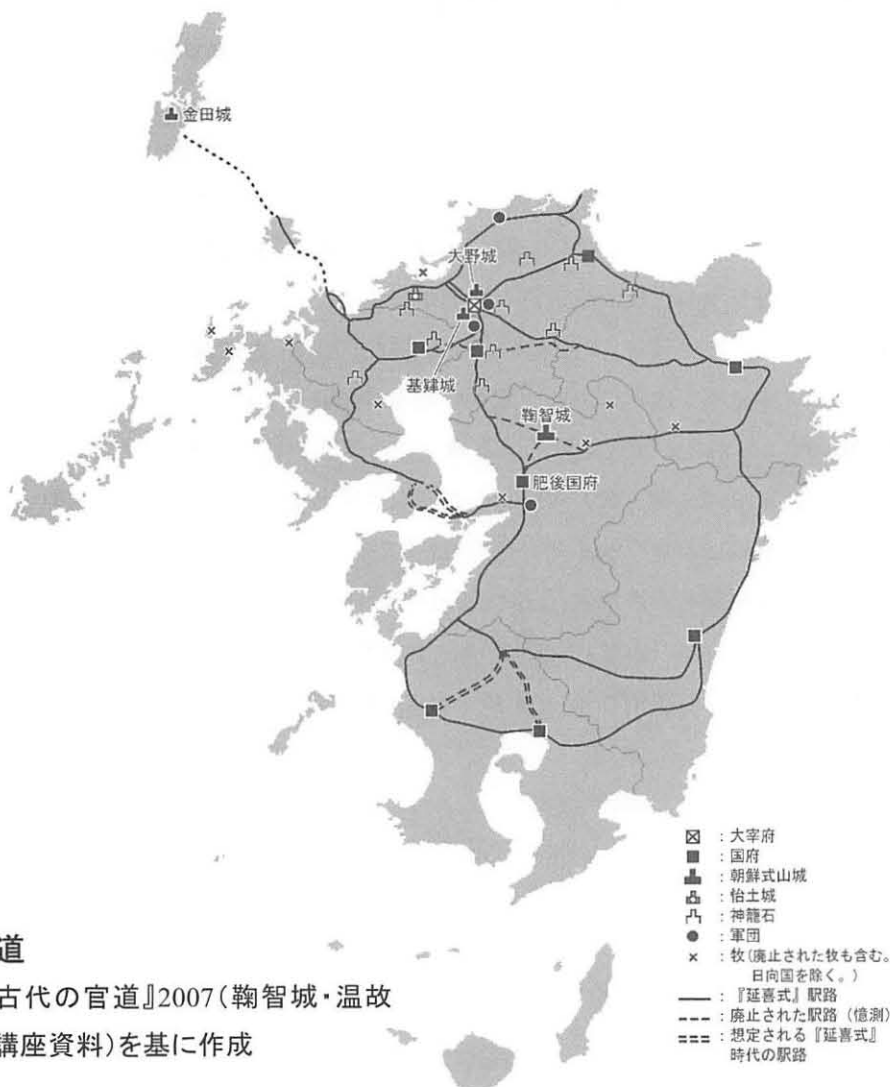
李進熙 1977「朝鮮と日本の山城」『城 (日本古代文化の探求)』社会思想社

渡辺正気 1988「神籠石の築造年代」『考古学叢考』中, 吉川弘文館

《参考資料》



古代山城分布図



古代の西海道

※日野尚志『古代の官道』2007(鞠智城・温故  
 創生館 館長講座資料)を基に作成

## 鞠智城関連年表

西暦（年号）	内容
645（大化元）年	大化の改新。
646（大化2）年	改新の詔の発布。
660（斉明6）年	唐・新羅により百済滅亡。
661（斉明7）年	朝倉橋広庭宮に遷宮
663（天智2）年	白村江の戦い ※大和朝廷軍が唐の水軍に敗れる。
664（天智3）年	対馬、壱岐、筑紫等に防人と烽を置く。筑紫に水城を築く。
665（天智4）年	筑紫に大野城、基肄城を築き、長門国に城を築く。
667（天智6）年	近江大津宮に遷宮 大和に高安城、讃岐に屋嶋城、対馬に金田城を築く。
669（天智7）年	高安城を修理。
670（天智9）年	高安城を修理
672（天武元）年	壬申の乱
676（天武5）年	新羅が朝鮮半島を統一。
678（天武7）年	筑紫国大地震
696（持統10）年	※「肥後国」の文献上の初見。
698（文武2）年	大宰府をして、大野、基肄、鞠智の三城を繕治する。 高安城を修理。
699（文武3）年	高安城を修理。 大宰府をして、稻積、三野の二城を修理する。
701（大宝元）年	大宝律令制定。
710（和銅3）年	平城京に遷都
719（養老3）年	備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停める。
756（天平勝宝8）年	怡土城を築城。
794（延暦13）年	平安京に遷都
799（延暦18）年	大宰府管内を除いて、烽を廃止。
858（天安2）年	（閏2月）菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。 （5月）肥後国菊池城院の兵庫の鼓が自ら鳴る。 （5月）菊池城の不動倉11棟が火災に遭う。
875（貞観17）年	カラスの群れが菊池郡倉舎の葺草を噛み抜く。
879（元慶3）年	肥後国菊池城院の兵庫の戸が自ら鳴る。

この電子書籍は、古代山城の成立と変容 鞠智城シンポジウム発表要旨 2018 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：古代山城の成立と変容

鞠智城シンポジウム発表要旨 2018

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2022 年 7 月 21 日